

Newsletter

February 2013

<http://www.aack.or.jp>

目次

京都大学山岳部ザンスカール遠征隊又ガツオ・カンリ峰初登頂報告 二〇一二年八月二一日～一〇月六日 装備・食糧・医療・会計報告と感想	6
隊長 荻原宏章	11
森本悠介	11
小阪花梨	12
澤田佑樹	12
上田 豊	12
現役初登頂への雑感	12
ザンスカールの未踏峰登山 (京大山岳部又ガツオ・カンリ (六〇八〇m) 初登頂によせて) 阪本公一	13
第二三回雲南懇話会(二〇一二年二月一五日開催) における講演概要とコメント 安仁屋政武、前田栄三	17
私の京大山岳部 一九六〇年代を中心に (連載・最終回) 吉野熙道	18
AAACK初期会長の就任時期について 酒井敏明	27
訃報 中国登山協会元主席史占春氏(AACK K名誉会員)死去 中国登山協会史占春元主席の葬儀に参列 岩坪五郎	28
図書紹介 田中淳夫・森と近代日本を動かした男 山林王・土倉三郎の生涯 平井一正	29
AAACK会員専用、日本山岳協会山岳共済会 および山岳遭難・捜索保険の案内	30
会員動向	32
編集後記	32

京都大学山岳部ザンスカール遠征隊又ガツオ・カンリ峰初登頂報告

二〇一二年八月二一日～一〇月六日

隊長 荻原宏章

遠征隊について

いま、京大山岳部は大きな部ではない。現在部員七名という有様であるが、山岳部には、Pioneer Work という精神がある。数十年來、そうした遠征は途絶えていたが、この夏、インド・ヒマラヤ、ザンスカール地域の六〇〇〇m級の未踏峰を初登頂した。

今回の遠征隊はザンスカール(インド・ヒマラヤ)南部にある、レナック谷左股の未踏峰、六〇七〇m峰(L15)*・六〇八〇m峰(L13)*の初登頂を目指して結成された。当初の目的であった六〇七〇m峰(L15)は登れなかったものの、六〇八〇m峰(L13)に初登頂を果たした。この六〇八〇m峰を又ガツオ・カンリ(Nga tsoey Kangri)と名付けた。意味は現地語で「我らの山」である。約一年前、山岳部のOBである阪本公一様に未踏峰の情報をいただいた。これを千載一遇の好機と見た仲間が集った。メンバーは四回生の荻

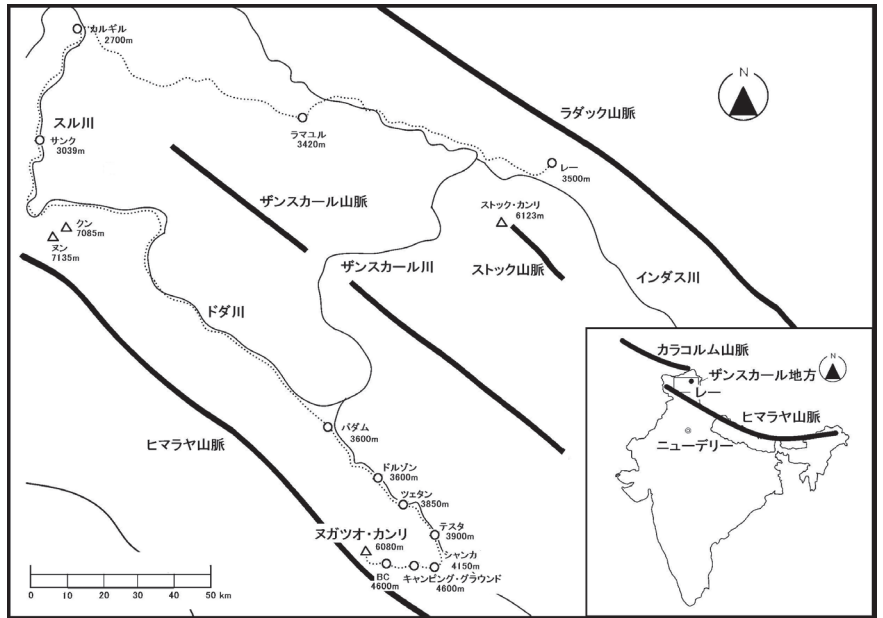
原宏章・森本悠介、二回生の澤田佑樹・小阪花梨の四人となった。さらに、ガイドのツワンさん初めスタッフ六名を加えて、計一〇名の隊となった。

*六〇七〇m峰(L15)の登山許可は事前にIMF (Indian Mountaineering Foundation) から、六〇八〇m峰(L13)の登山許可は現地にてIMFより出向のリエゾン・オフィサーから取得した。なおL13、L15というのは二〇一一年に阪本氏が設定した、仮称である。

行動記録

Base Camp (以下BC)まで(八月二一日～九月八日)

まず、デリーからレーという人口五万人程度、標高三五〇〇mの地方都市に飛ぶ。そこから、悪路を車でまる三日走り、パダムという小さな町に着く。そこで道路がなくなり、約一週間馬と徒歩で進み、やっとBCに到着する。BCを拠点にして、Camp 1・2 (以下C1・C2)を作りながらアタックを狙うことになる。今回我々が遠征した地域の山はまだほとんど登られた記録のない地域である。
八月二一日 荻原・小阪、出国。デリー着。



ザンスカール概念図 ver1.1

八月二二日 森本・澤田、出国。デリー着。
 八月二三日 在インド日本大使館、IMFを訪問。隊に Liaison Officer が合流。LOは民間人であった。
 八月二四日 朝三：〇〇、レー(三五〇〇m)

へ立つべく、空港へ向かった。空港で、澤田がパスポートと隊の予算四〇万円を紛失したことが発覚。パスポート再発行のため、

在インド日本大使館、警察署を訪問。刑事とのやり取りで遠征中一番、疲労困憊した。エージェンツと相談し、澤田以外の隊員は、翌日先にレーへ向かうこととした。
 八月二五日 デリー↓レー

澤田をデリーのエージェンツに託し、荻原・森本・小阪はレーへ飛んだ。レーのホテルはあのブラットピットも泊まったホテルである。飛行機でいきなり高所に来たことと、昨日までの疲れが相重なつて森本が体調を崩す。

八月二六日 レーにて休養。

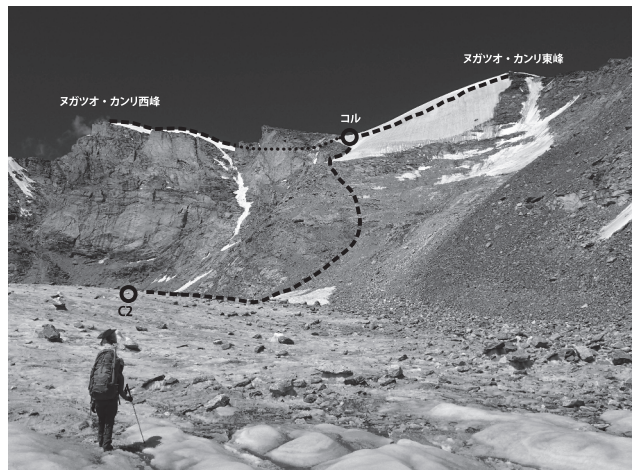
レーの旧王宮や街を一通り見てまわった後、必要な日用雑貨を買い揃える。旧王宮は丘の上に位置するが、そこに行くためのわずかな高低差でも息切れを感じ、高所に来たのだなど実感を覚える。

八月二七日 レー↓ラマユル(三四二〇m)

車移動。道中ゴンパに寄ったりする。どうやらこの地方のガイドの間で我々のパスポート紛失事件が有名になっていているらしい。見ず知らずの観光客の口からこのことをきいて初めて知る。

八月二八日 ラマユル↓サンク(三〇三九m)

車移動。ロッジに泊まる。ロッジからはこの地方の代名詞ともいうべきヌン・クンの雄大な姿が見える。夕焼けに染まるヌン・



ルート図

クンの姿に一同ロッジから飛び出し、しばしその姿に見とれる。

八月二九日 サンク↓パダム(三六〇〇m) 車移動。

デリーの澤田は新しいパスポート・ビザを入手。

八月三〇日 パダムにて休養。

澤田、レーに到着。高所順応を兼ねてパダムの裏山を四六〇〇m付近まで登ってみるが、人によっては軽い頭痛が出た。思ったより規模の小さい町であったがインターネットカフェがあるのは助かった。

八月三一日 パダムにて休養。

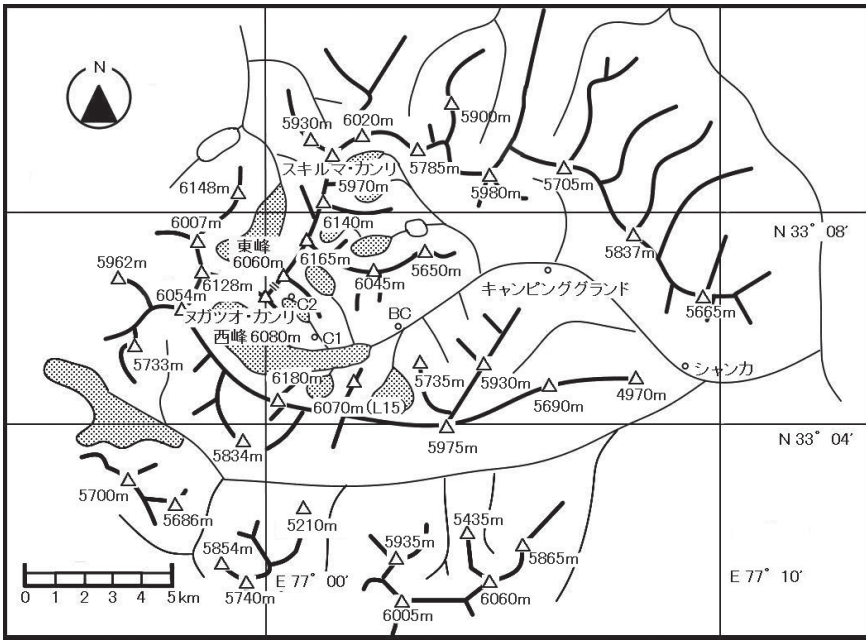
澤田、カルギルに到着。
 九月一日 パダムにて休養。

澤田、パダムに到着。無事、全員集合した。澤田も元氣そうで、ひと安心した。

九月二日 パダム↓ドルゾン(三二六〇〇m) 車移動。

トレッキング開始

九月三日 ドルゾン↓ツェタン(三三八五〇m)



レナック・ナラ概念図

河の左岸の道を延々歩いてゆく。対岸では政府にやとわれた人が車道を作っている。我々の姿を見ると皆仕事の手を休めジュレールと挨拶してくる気さくな人達だ。

九月四日 ツェタン↓テスト(三二九〇〇m)

やせた土地に緑は少なく、河の兩岸の傾斜の緩やかなところにわずかばかりの農地を作り小さな集落をなしている。村の外れや道中には崩壊しているものもあるがステューパが並んでおり、この地方の人の厚い信仰心を感ぜさせられる。

九月五日 テスタ↓シヤンカ(四一五〇m)

谷は大きく開け、河の水量も減り蛇行するようになった。いよいよレナック谷の入り口までやって来た。シヤンカは三家族が住む小さな村である。

九月六日 シヤンカにて休養。

九月七日 シヤンカ→レナック谷、キャンピング・グラウンド(四六〇〇m)

レナック谷の君主ともいえるべきL15が見える。キャンピング・グラウンドは現地の人が放牧に来る場所である。

九月八日 キャンピング・グラウンドにて休養。

レナック谷左俣の山を登っていた、下山中のJAC(日本山岳会学生部)隊と情報交換を行った。

た。彼ら是我々より一週間早くレナック谷に入り、右俣の未踏峰を登っていた。無事初登頂したことを祝った。(JAC隊によって、山はスキルマ・カンリと命名された)

登攀期間

●BC入り

九月九日 曇↓雨

起床(六六〇〇)〜出発(八二〇〇)〜BC・四六〇〇m(一一〇〇)〜BC出発(一一〇〇)〜L15*基部五〇五〇m地点(一二二〇〇)〜BC着(一三二〇〇)

いつ降りだしてもおかしくない曇天であつたが、BCまであと二時間ほどなので、出発した。BCから見上げるL15は、写真で想像していたものより、圧倒的な迫力である。

BC着後はレストの予定であつたが、ここまで来たという興奮のため、萩原と森本はL15の偵察へ出た。急なガレ場を登り、L15の基部五〇五〇mまで近づいた。雪稜の末端五五〇〇m地点へ続くガレ場はかなりの傾斜で、浮石だらけである。

L15はガレ場、雪稜ともに難しいと判断したため、計画通り先にヌガツオ・カンリをアタックすることとした。

九月一〇日 曇↓晴

Base Campにて休養。翌日のC1設営の準備。ツワンさんとキッチンボーイ二人、コックにC1まで荷物を上げてもらうことにした。夕方から、久しぶりに晴れた。



BC and L15

●C1設営
九月一日 晴

起床(五〇〇)〜出発(六〇〇)〜
C1・五三〇〇m(九三三〇)〜C1出発
(一一〇〇)〜C2予定地・五五〇〇m
(一一〇〇)〜C1(一二三三〇)〜B
C着(三三〇四〇)
隊員四名、L0、ツワンさんたち四人で
BCを出発。BCを出ると、すぐにレナッ
ク氷河に乗った。下部は岩や土砂で覆われ
ており、ガレ場を行くのと変わらない。
五〇〇〇m地点でレナック氷河から降
り、北側の枝谷へ入る。ヌガツオ・カンリ
氷河の手前にC1を設営し、ツワンさん達
はBCへ帰っていった。



バダムにて澤田が合流し、ついに全員集合

休憩後、萩原と森本とでC2の偵察に出
た。ヌガツオ・カンリへの氷河の舌端を上
がると、ヌガツオ・カンリとそれに続く氷
河の全容が見渡せた。もうヌガツオ・カン
リはすぐそこである。氷河は雪をかぶつて
おらず、ヒドウンクレバスの危険は全くな
い。ロープアップどころか、アイゼンすら
履かずに歩いて行けた。
四〇分ほどでC2予定地まで行け、拍子
抜けした。五五〇〇mまで上がり、岩陰に
登攀具類をデポした。ヌガツオ・カンリは
予想よりかなり雪が少なく、五七〇〇m
まではガレ場の登りである。日にあたって、
上部の雪積からかなりの水が溶けだしてい
る。

九月二日 晴

Base Campにて休養。ヌガツオ・カン
リは積雪が少なく、ルートもわかりやすい
こと、全員体調がいいことから、C2を設
営し、そのままアタック体制に入ること
にした。

●C2設営

九月三日 晴↓曇↓雪

起床(四四〇)〜出発(六〇〇)〜
C1(九三三〇)〜C1出発(一一
〇〇)〜C2設営・五五〇〇(一四
〇〇)〜C1(一六〇〇)

隊員四人だけで出発。C1からはC2設
営のために荷を上げたが、高度と暑さのた
めに、全員かなり疲労してしまった。C2
では氷河上にスレート状の石を並べ、その
上にテントを張った。C2で澤田が頭痛と
目眩を訴えたので、C1に降りることにし
た。

C1についていた頃からガスがかかりはじ
め、そのうち雪も舞いだした。気温は二度
程度とあまり寒くないこともあり、テント
がビショ濡れになってしまった。また、四
人が入るにはテントが小さいこともあり、
テントの中は恐ろしく不快であった。その
うち森本がたまりかねて、ビバークサック
にくるまり、外で寝始めた。

夜半、小阪が何度か吐いた。頭痛などは
ないというが、明らかに高度障害である。

九月四日 雪↓曇↓晴

起床(九〇〇)〜澤田・小阪C1を出

発(一二:三〇)〜荻原・森本C1を出発(一四:二〇)〜C2(一五:〇〇)

朝から雪が降っており、不愉快な天気であった。澤田と小阪は朝から元氣そうであり、BCへ帰ることを残念がっていたが、BCへ下山させた。二人が出発してから、すぐに晴れ上がり、青空が広がった。

荻原と森本はのんびりC2に上がり、アタックに備えた。

●ヌガツオ・カンリ、アタック 九月二五日 晴

起床(二:四〇)〜C2出発(四:二〇)〜ヌガツオ・カンリEast・West間のコル到着(六:四五)〜コル出発(七:〇〇)〜ヌガツオ・カンリEast・六〇六〇m登頂(七:一五)〜ヌガツオ・カンリWest・六〇八〇m登頂(一〇:〇〇)〜C2(一二:一〇)

二時半過ぎに起床。アラームの音が小さく、少し寝坊してしまった。夜は少し風が強く、雲も多めであったが、アタックとする。

森本がトップで、クレバスを避けながら、ガレ場に取り付いた。この時間では、すべての雪解けの流れが凍っており、無音であった。ガレ場は、思ったより傾斜もなく、どんだん高度を上げることができた。五:三〇頃、夜が明け始めた。

六:〇〇、雪稜の末端に着いた。雪は硬いが、傾斜は四〇度程度である。アイゼンを履き、延々同じ傾斜の斜面をジグザグに登り、六:四五、コルに到着した。

コルから見れば、Eastまでの稜線も広々としており、すぐそこであった。一五分ほど稜線を歩き、森本がヌガツオ・カンリEastを初登頂した。EastのPeak自体もスレートのガレ場が露出しており、ケルンを作ったり、写真をとったりしてくつろいだ。うれしさもあつたが、むしろ、成功したことに安堵した。

Eastから、コルからWestへの稜線が確認できたが、予想よりも難しいように見えたが、時間にかなり余裕があるので、Westにもアタックすることにした。

稜線に並行に二本ほどクレバスがあるので確認できたので、念のため、三ピッチほどロープを出して進んだ。雪が固く、スノー



Summitting East Peak 1



Ridge to West Peak

バーを打ち込むのに非常に苦勞した。WestのPeakは岩が出ていたが、そこでケルン*のようなものを発見した。ケルン以外には全く人工物はなく、手がかりは無かった。ケルンを発見したときは、落胆というより、ただ驚いた。むしろ、こんな辺鄙なところの山を自分たち以外にも登った人間がいたことに、少しうれしささえ感じた。

帰りはザイルを出さずに、コルまで帰った。コルからの帰りでも、雪はほとんど柔らかくなっておらず、アイゼンをきかせながらフリーでC2まで帰った。C2まで帰ってくると流石に疲れが出て、その日はC1まで降りずに、C2泊とした。

九月一六日 晴↓雪

起床(六:〇〇)→C2出発(八:

三〇)→C1(九:〇〇)→C1出発(九:

三〇)→BC(二一:一〇)

C2を撤収し、C1へ向かうが、荷物が多く、ダブルザックとなった。昨日の疲れと、足元が見えないのとで、ふらつきながらC1まで降りた。C1では、ツワンさんたちが待っていてくれ、荷物を持ってもらい、BCまで降りた。本当にありがたかった。BCについてすぐに、雪が降り始めた。アタックできたのは、本当に運が良かった。

九月一七日 雪

Base Campにて休養。BCにて休養を取り、L15へ取り掛かることとした。終日雪が降るが、余り積もらず、うっすらと白くなる程度。午後には晴れ間が見えていた。

九月一八日 雪↓晴

BC出発(一四:三〇)→シャンカ(一九:四五)

朝四:〇〇、ツワンさんに起こされた。何事かと思つて外に出ると、一面雪であった。夜半に降り始めた雪が、三〇cmほども積もつたそうだ。BC総出で雪かきを行った。

一二:〇〇になつても止まず、L15は雪崩の危険、ヒドウンクレバスのリスクが高すぎると判断し、L15アタックはあきらめることにした。これ以上降ると、馬が歩けなくなり、BCに閉じ込められる恐れがあることから、下山することに。シャンカについたのは日が暮れてからであった。シャンカでは民家に泊めさせていただいた。

登攀期間終了

九月一九日 シャンカにて休養。

九月二〇日 シャンカ→テスト

九月二一日 テスタ→プルネ

プクトル・ゴンパ見学。

九月二二日 プルネ→ドルゾン

トレッキング終了

(ここからは車・飛行機移動)

九月二三日 ドルゾン→パダム

九月二四日 パダム→カルギル

九月二五日 カルギル→レー

九月二六日 レーにて休養

九月二七日 レーにて休養

九月二八日 レー→デリー

一〇月一日 在インド日本大使館、IMFを

訪問。IMFでブリーフィング。

一〇月三日 森本、帰国

一〇月五日 荻原・小阪、帰国

一〇月六日 澤田、帰国

*IMFにこのケルンのことについて問い合わせたところ、この山は過去に登った記録は一切ないので、記録を提出すれば、我々が初登頂として登録される旨を通達された。自然物でなければ、ケルンは無許可で登山を行ったクライマーのものかもしれない。

装備報告

計画

インド国内で登山するにあたってはエリジェントに、ベースキャンプまでの生活に必要な装備一式、全ての装備の運搬の手筈を整えてもらった。したがってキャラバン中にわれわれに必要なのは持参の寝袋・衣類程度のものであり共同装備としては登攀活動中に必要なもののみを用意した。

実際

○個人装備全般

個人装備は各自が好む装備を自分で用意するのがベストであり、この時期の六〇〇mであれば日本国内における冬用装備が流用できるため各自に用意してもらった。

○高所用個人装備

ザックは荷揚げに便利な八〇Lザックと四〇Lアタックザックを用意した。今回の遠征では登攀装備がそこまで多くなかったのでパッキングした段ボールを背負子で運ぶのではなく、八〇Lザックに登攀装備をつめて運ぶので十分であった。

衣類はウールの下着、ゴアテックスのアウトター、ダウンの防寒着といった日本の冬山で使用している装備を流用した。乾燥した気候であるが、体感温度は日本の晩秋〜初冬程度であったため十分であった。

靴は比較的暖かい気候であるので、今回のためにオーバースューズ、ダブルブーツの靴

を用意せず、皮のシングルブーツ、ゲイター付シングルブーツの靴を使用したのが問題なかった。

○テント、マット

BCでは雪が積もらないということもあり、食事・ミーティング用にはエージェントのメステントをつかい、各隊員の滞在用にもエージェントのキャラバン用テントを使った。

高所キャンプでは重量を減らすため各テントのメーカーのうたう収容人数ちようどで考えたが、広いほうが快適であり何かあつた時のことを考えて、実際の収容人数の一・五倍はあるテントを持つていくべきであつたらう。

各テントは骨組みが二本のドーム型テントであつたが、いずれの幕営地も谷の中であり風に対する強度は問題にならなかつた。

テントマットは個人用のテントマットだけ用意したが、特に問題となるようなこともなく共同装備のマットはかさばるので無くてもよいかもしれない。

○燃料

BCまではエージェントに任せておりケロシンであつた。HCではボタンガスとした。エージェントに頼んで買つてもらつたガスカートリッジは韓国製の高所用ガスカートリッジであつたが、高所では弱火の調節が難しいだけで十分機能した。

○登攀用具

ロープはフィックス用に八mmのナイロンロープを、登攀用に八mm六〇mのダブルのダイナミックロープを用意した。フィックス用

八mmロープは二〇〇m用意したが、全く使わなかつた。

スノーバー・アイスクリューは登攀用、フィックス用にと十分な数を用意したが実際に使つたのはスノーバーだけであつた。雪は日本の夏の雪溪のように固く信頼できる支点として十分であつた。

また、クレバステスクリューを想定してプリー・トラククションを、フィックス通過のためにアッセンダーを各自に用意した。使用の機会はなかつたが、国内の山での使用感からレスキューの際の効率が上がること間違いなしである。

○酸素

気圧ボンベの使用に習熟した者がいないので、酸素缶で二〇L用意した。最終的に順化がうまく行つたので全く使用しなかつた。

○梱包

個人装備は各々のザックに梱包し共同装備はトレッキング中ではエージェントの準備してくれた麻袋に詰め替える予定であつたので安くすむ段ボールに梱包した。トレッキングの開始時点で段ボールの中身を麻袋に詰め替えた。またこのときトレッキング中よく使うものはレーで購入したダブルバックに梱包した。

○輸送

京都からレーまでの荷物の輸送には飛行機を用いた。レーからベースキャンプの輸送には車と馬を用意してもらつて運搬した。

飛行機の輸送では、預け荷物の超過料金を支払い荷物を運んだのだが、帰りの便では皆

のお土産が増えたのだろうか、予想外の超過料金を払う羽目になつたが、別送手荷物として業者に任せて運んでもらうより、荷物紛失のリスクは減るので良かったかもしれない。

馬による運搬に関して、馬は前もつてエージェントにお願いして近くの村から馬を集めてもらつていた。トレッキング中では撤収の都合上、馬は本隊より遅く到着するので薬品、嗜好品、修理セット等の一部は本隊が持つておくべきであつた。またキャラバン中は馬が歩くには危険な箇所も出てくるため、馬が川に転落しないとも限らない。馬で運ばせる荷物は一つの荷物に同じ品目を集中させない等のリスク分散の配慮が必要であつた。

総括

今回の遠征隊は小さな隊であり、ほぼ全ての装備が日本の山で使う装備で事足りた。荷物を少なくしようと最小限のロープ・登攀具しか用意しなかつたが、刻々と変化する山のコンディションに対応できるように、BCまでは様々な種類の道具を持つていくべきだった。例えばピッケルは登攀に適したバナナシャフトのもの、歩きに適したストレートシャフトのもの、アイゼンも横爪のもの縦爪のものなどをもつていきその中から必要なものを選び、アタックに出かけるといった具合である。

食糧報告

準備

計画・トレッキング中およびBCでの食事はエージェントに用意してもらい、HCでの食事とBCでの嗜好品を我々が用意した。準備を単純にしミスを事前に防止するため、献立は単純なものとし、また量は多めにした。事前山行において遠征を意識した食事を用意してその結果を参考にし、また他隊、二〇一〇年の当部のニレカ峰遠征、書籍も参考にした。HCでの食事は、軽量化を図るため、 α 米とフリーズドライ食、インスタントラーメンを基幹とすることとした。

調達・物資を空輸する際に支払う超過料金をなるべく減らすため、現地で可能な限りの食糧を調達することも検討したが、万全を期するため、多くは日本で用意することとした。

実際

レーの商店の品ぞろえが予想以上に良かったため、レーションは現地で賄うことができたかもしれない。

しかし、品切れがあったり、デモで商店が閉まっていて思うように調達ができないことも十分考えられるので、物資は日本で調達した方がよいだろう。

トレッキング中の朝夕及びBCの食事は、香辛料をふんだんに用いたデリーでの食事は打って変わって、野菜を中心とした日本人の食べやすい味付けのものであり、量も十分

に満足のゆくものであった。ただし、肉料理が少ないため、一部の隊員は不満を感じていた。

トレッキング中のレーションは、チーズ、チョコレート、リンゴ、ジャガイモ、茹で卵、ジュースなどであった。

C1での食事は量が多く味も濃かったため、食べにくかった。もつと食べやすいものもBCから持っていくべきであっただろう。スープやカップラーメンに関しては塩辛いものが多く、ココアなど甘い飲み物をもつと飲みたかった、種類がすくなかったと不評だった。朝食に関してももうすこし種類を増やすべきだった。また、フリーズドライの食品がかさ張り、またゴミが多くてたので少し扱いに手間取った。

日本から持っていた食糧のうち、行動食としての食糧は二〜三割ほどしか消費しなかった。これはスタップがHCを設置する日のレーションを用意してくれたのと、単純に行動した日が予定より少なかったからである。

医療報告

準備

・高山病や応急処置などについて学習会を開き、またOB諸氏に話を伺うなどして、医療知識の拡充に努めた。

・A型肝炎、狂犬病などの予防接種を受けるよう隊員に周知した。

実際

遠征中は、高度三五〇〇mに達するレーに到着した日から、登山を終了し最奥の村であるシャンカに下降するまでの期間、体温、脈拍、SpO₂、最高および最低血圧、AMSスコアを体調管理表に記入した。

○入国後

インド入国後すぐに、隊員の多くが下痢に悩まされたが、下痢止め、抗生剤を投与すると数日で全快した。これが細菌感染によるものなのか、日本人にはなじみの薄い、香辛料を多く用いた料理により、胃腸が刺激されたことによるものなのかは不明である。

○トレッキングまで

海拔数百mのデリーから標高三五〇〇mを超えるレーに飛ぶ前夜および翌朝、急性高山病を警戒し、隊員全員がダイアモックスを一回につき半錠服用した。レーにて森本が高熱を出し頭痛、疲労などを訴え寝込んだが、一日休養をとることにより回復した。

デリー滞在中の澤田は連夜の渋り腹とそれに伴う不眠に苦しんだ。DE散を服用すると症状はやや改善したが、完治はしなかった。

○トレッキング期間

レー以降、軽い高度障害を起こす隊員が出現し、主に頭痛を訴えたが、ロルフェナミンを投与すると緩和した。標高四一五〇mのシャンカを出発した日から、澤田は行動中に軽い頭痛を訴えるようになったが、行動を休止するとやむ程度のものであったため、特にロルフェナミンは服用しなかった。

トレッキング中、小阪・澤田両隊員の脈拍

が継続的に高く、また澤田の SpO_2 値は八〇周辺を推移し時々八〇を下回った。

○登攀期間

C1建設に参加した澤田は依然として行動中の頭痛を訴えたが、隊の行動に支障をきたすほどではなかった。しかし、C2到達直後から澤田の頭痛は悪化し、 SpO_2 値も七〇を下回った。また歩行に軽いふらつきが見られた。同日、C1において夜間小阪が嘔吐した。高度障害が出たと判断し、翌日小阪・澤田両隊員はBCに下降した。

登攀期間中、胃腸症状はおおむね出なかったといえるが、一部の隊員は下痢を発症したり、継続的な軟便を確認するなど、胃腸症状が完全に収まったわけではなかった。いずれも抗生剤の服用により、数日のうちに回復した。

全体的に、行動したのちはある程度疲労したが、休養をとることにより各隊員とも体力を回復し、疲労困憊するものはいなかったといえる。

○帰国まで

レーを指指してのトレッキング中は特筆すべきことはない。レーにて、萩原が痛烈な腹痛を訴えたが、胃潰瘍薬を服用したところ数日後に回復した。

高度順応について

本遠征においては、標高数百mのデリーから三五〇〇m超のレーに移動するとき、トレッキングを開始してから標高四六〇〇のBCに入るまで、そして標高六〇〇〇mを超える山頂を目指すときの高度障害を警戒し、そ

れに向けた順応計画を立てた。

○計画

レーに飛ぶ前後はダイアモックスを服用する。万一高度障害を起こした隊員が出た場合は、標高二七〇〇mの町カルギルまで移動しそこに滞在、回復を待つ。

BC入りまでの高度順応も万全を期し、シヤンカ以降は一度高度を獲得したのちその日は下降し、翌日その地点に移動して宿泊することにす。つまり、初日はシヤンカを出発してキャンプ・グラウンド(以下CG)に到達したのち、再度シヤンカに下降し宿泊、翌日CGに入りそこで幕営するという具合である。

山頂のアタックに関しては、体調をよく把握し、ダイアモックスを服用するなど、可能な対策を十分にとることとする。

○実際

レー行きの前後にダイアモックスを服用したせいもあつてか、隊員は特に深刻な高度障害を起こすことはなかったため、レー以降の行動は予定通りのものとなった。

BC入りまでの高度順応は多くの隊員が順調に推移したが、澤田の SpO_2 値が安定して低く、また小阪と澤田の脈拍が継続的に高かったため、澤田は毎日ダイアモックスと柴苓湯を服用、他隊員も必要に応じて服用した。

休息をとるためシヤンカに停滞した日、散歩がてら裏山に登り標高四五〇〇mまで登高、これを高度順応として、翌日はそのままCGに入った。この日程変更は、隊員の調子がよさそうであったためであるが、隊員の一人のパダム入りが遅れたため、日程がやや押

していたということも関係している。

二回生は二人ともアタック前日にハイキャンプにて高度障害を起こしたため下山、上回生二人がアタックを敢行することとなった。森本はアタック前夜および当日の朝にダイアモックスを服用した。

総括

携行した医薬品がやや不足したきらいがあった。リエゾン・オフィサーが隊員の一人として扱われ、そのため彼にも医薬品を提供しなければならぬことを想定していなかった。最終的には医薬品は余ったものの、トレッキング期間中多くの隊員が頭痛を訴えロルフェナミンを服用したため、BCに常備する予定のロルフェナミンが底をつくおそれが出てきた。そのためトレッキング後半においてはロルフェナミンの使用を制限せざるを得なかった。医薬品を余裕をもって利用するためには、ある程度多めに医薬品を用意するのがよいのではないかと考える。

遠征数か月前まで予防接種について説明を行わなかったこと、また予防接種の周知や各隊員の接種状況の把握が不徹底であったため、十分な時間をとることができず、結果として一部の隊員は有効な予防接種を行うことができなかった。

2012 KUAC Zanskar遠征 決算

決算 収入部

項目	合計¥
ネパール基金繰り越し ¹	1,248,495
AACK助成金 ²	200,000
個人負担金	1,320,000
収入部合計	2,768,495

為替レート
決算計上時
\$1=¥79
₹1=¥1.42

決算 支出部

項目	決算額		
	円払い¥	ドル払い\$	ルピー払い₹
渡航費	517,250	0	0
航空券	492,750	0	0
ビザ	20,000	0	0
航空券キャンセル料	4,500	0	0
食燃料費	101,176	0	0
HC以上食事	86,200	0	0
HC以上燃料	14,976	0	0
滞在費	168,744	0	32,357
Delhi	83,424	0	8,900
Leh	74,260	0	0
Kargil	11,060	0	0
食費	0	0	23,457
交通費	517,357	0	32,816
chartered cab	323,396	0	10,616
airfare	182,901	0	7,100
taxi	0	0	13,100
train fare	11,060	0	2,000
登山料	0	1,620	0
Open peak permission fee	0	900	0
The equipment fee for Liaison Officer	0	500	0
additional peak permission fee	0	220	0
人件費	990,345	0	49,606
Agent fee	964,590	0	0
Sightseeing Guide fee	17,775	0	0
Insurance for staff	0	0	13,606
Tip for Trekking Guide	0	0	19,000
Tip for Horse man	0	0	4,500
Tip for Cook	0	0	5,500
Tip for Assistant	0	0	7,000
Present for Liaison Officer	7,980	0	0
装備費	82,225	0	6,143
日本購入物品	82,225	0	0
現地購入物品	0	0	6,143
輸送費	0	0	29,400
Excess(往路)	0	0	14,280
Excess(帰路)	0	0	15,120
保険費	38,220	0	0
日本山岳共済山岳保険	38,220	0	0
医療費	26,070	0	0
予防注射	0	0	0
薬品	26,070	0	0
雑費	6,130	0	1,936
資料コピー代	3,120	0	0
振込手数料	0	0	0
郵送代	3,010	0	0
現地雑費	0	0	1,936
支出部 計	2,447,517	1,620	152,258
支出合計 (円)		2,791,703	

1 2010年のニレカ峰遠征の際の募金繰り越し金

2 京都大学学士山岳会(AACK)からの助成金

送費の節約に努めるだけでよかった。

総括

滞在先のホテルは海外に不慣れな我々に配慮してかエージェントは立派なホテルを予約してくれていたが、風呂に入らないことに慣れている山岳部員としては、もう少し安上がりなホテルでもよかったように思う。実際帰路ではホテルの変更などをした。それとリエゾンオフィサーの滞在ホテルが日本人隊員と異なったりするトラブルがあったのだがリエ

ゾンオフィサーも隊員と同じホテル、設備で泊まるようしっかりと確認すべきであった。

人件費は現地でのトッキングガイド一人、コック一人、キッチンボーイ二人、馬方二人を雇ったが人件費は一日当たり全員分で二万円程度であった。妥当な金額であつたらう。

現地でエージェントに支払うお金の一部四〇万円とパスポートを紛失するというトラブルが発生したが、お金に関してはエージェントに頼み不足分は遠征後に支払うことにしてもらった。パスポートをなくし行動予定が大きく変わることとなったが、予定変更に伴う追加料金は安い宿を探したり、一台の車にすし詰めで乗り込むなどして交通費・滞在費を浮かせることによって隊の予備費(二〇万円)で十分補うことができた。しかし、もろもろの支払い(特に輸送費)で予算オーバーすることが多く、遠征終了時には予備費がほぼ残っていない状況だった。予備費は怪我や病気などの有事の際に備えて三〇万ほど用意する必要があつたであらう。

会計報告

計画

今回の遠征ではエージェントの経営者が日本人の方であることから滞在費、交通費、人件費は日本円一括払いすることとなった。阪本OBから紹介を受けたエージェントであり、非常に親身にしていただき、滞在費、交通費、人件費等の節約にも大変な配慮をしていただいた。そのおかげで我々は食料費、輸

遠征を終えて

荻原宏章

かつて、京大山岳部は大きな遠征隊を組織し、大きな未踏峰をいくつも目指し、登頂してきた。それらに比べれば、今回の遠征、対象などは小さなものである。時代、ということも、もちろんあるとは思ふ。

大きな組織をバックに、大きなことを達成することは、もちろん困難である。ただ、小さな組織で、それに見合った目標を目指すことも、難しいことなのだ、と思う。その相應な結果が、多少なりとも他人の評価に値することとなったのであれば、それは隊長として望外の喜びである。

今回の遠征では、諸事情により、私が隊長になってから、三ヶ月しか準備期間がなかった。その短い時間の中で、悪戦苦闘の日々であった。無責任なことをしながら、「責任」というものを考えさせられた時間であった。ろくに準備山行も組めず、練習もおろそかになってしまった。ヒマラヤや、高所の勉強にしても体裁を整えたにすぎなかったように思う。そういう意味では、非常に良くない前例を残してしまった。

何事にせよ、余裕がなさすぎた。隊長が無能なとき、一番に迷惑するのは隊員である。三人には本当に迷惑をかけたと思う。よくもまあ、不真面目な隊長についてきてくれたものだと思う。本当に感謝している。

ほかの何事とも違い、山では人は怪我もするし、死ぬこともある。その中で、隊長の仕事は登頂することではないだろう。全員無事に降ろすことである。その意味で、最低限のことはやり遂げたということが出来ると思う。遠征の最中も、判断で悩むことも多々あった。初登頂などは、ある意味おまけのようなものである。自分が今回の遠征で、心底成功だと思ふのはこれである。

遠征出発まで三ヶ月、というまことに少ない時間と準備で、登頂に成功し、隊員一同、無事に帰ってくる事ができた。対象とした山は大きいとは言えないが、この準備の中で初登頂できたことは、大成功と言つて良いであろう。この成功は、ひとえに松林会長を始めとした、様々な方々のご助力によるものである。この場を借りて、篤く御礼申し上げる。そしてもちろん、この経験は、後に続く者のためのものであることは言うまでもない。今回の遠征を無駄にすること無く、海外や、より大きな山への関心を受け継いでいってもらうべく、努力してゆきたい。

苦難の先に

森本悠介

今回の遠征は私にとって初めての海外遠征、未知の高度、情報の少ないルートと遠征前は毎日がその重圧につぶされそうだった。それなのに怪我のせいで走ることもままならない日々が続き、忙しい遠征の準備の合間に

ふと振り返ると、こんな状態の自分が遠征に行つてもよいものだろうかとただただ焦燥感が募る毎日、あつという間に時間は過ぎ決して万全な準備ができていたわけではないが遠征に旅立つこととなった。

現地に着くと不思議と気分は落ち着いていた。ここまで来ると出発前の不安よりも今の自分にできることを見誤らないようにと集中していたことがそうさせたのかもしれない。遠征中は多少のトラブルはあつたものの毎日が作業のように過ぎていき気が付けば登頂していた。何のことはない、毎日山を見て考え、できることを精一杯やっただけである。意外なことに登頂した瞬間には考えていたような充実感・達成感が出てこず、山頂から見渡せる美しい景色にただただ感動するだけであつた。

遠征が終わつてようやく出てきた心地よい充実感につつまれながら、これからどんなことができるだろうか何をしようかと想いを巡らせる至福のひと時。大変なことだろうが辛いことだろうが、もつというんなことをやりたいという気持ちが高まつていくのを感じた。

山登りといつても様々なスタイルがあり、それによつて見える山の一面も違うのだろう。今回の遠征は今まで味わうことのなかった山の一面を垣間見て、自分の山登りの方向性を考えさせられるものとなった。最後になりましたが今遠征を支えてくださった皆様、また遠征隊の皆様本当にありがとうございました。

遠征を通じて

小阪花梨

今回、本遠征に参加を希望するに至った理由は、単純に未知の世界に踏み込んでみたい、という想いからであった。私にとっては初めての遠征であり、準備をするにしても、もちろんそのノウハウも持ち合わせていず、他の隊員に指示を受けることが多かった。出発までたった数ヶ月という中で、事前準備はただただ大変だった振り返ると、当初は春山のこともあつて、意欲や積極性、また自分は一隊員であるという自覚が欠けていた。遠征の準備が捗らなかつたのもこれに起因しているのではないか。この点で他の隊員に多いに迷惑をかけてしまい、本当に申し訳なく思う次第である。

遠征中は壮大な自然に囲まれ、日々好きなだけ山を望んでいた。なんとすばらしい景色であつたか。黙々と歩きながら、様々なことを考えた。日本での忙しい日々と比べると、こちらでは時間がゆつくりと流れていた。にもかかわらず、時間はあつという間に過ぎ去っていったように思える。初めて氷河の上に乗ったことも、先輩方が無事登頂し下山してきたことも、随分昔のことのように思える。しかしそこで肌で感じた経験は、忘れられないものとなり、また今後にも繋げられる大きな成果となつた。この遠征の準備から終わりまでの経験や反省を通じて、次はもっと何か

大きなことを主体的にやってみたいな、私には何ができるかな、と考えるようになった。

現地ではトラブルはあつたものの、幸運にも大きな怪我や事故もなく、皆無事に下山出来、総じて実りのある充実した遠征だったと思う。これは皆の支えがあつたからこそなしかつたことである。最後に、支援して下さい皆様、そしてなによりも隊員の皆さん、ほんとうにありがとうございます。心より感謝致します。

インド〜未来への羅針盤

澤田佑樹

準備が妙に忙しかつたのが出発前の印象であつた。今から振り返ってみると、そこまで準備を忙しくさせるようなことをしたのだからかというのが率直な感想である。諸事情により準備を始めるのが遅れてしまつたとはいえ、総じて準備が後手後手に回つてしまつた。次に海外遠征に参加するときには、今回の経験を生かし、もっと効率よく準備を進めてゆきたい。

遠征に向けて考えられる準備は行つたもの

現役初登頂への雑感

上田 豊

去年十二月、山岳部がザンスカルで初登頂

の、やはりどこかに甘さがあつたようである。というのも、高山病の勉強会など、準備が形式的なものに終始し、実効性に欠けるのではないかと考えられる面も見られたからである。それは結局のところ、本遠征への参加態度をどこか反映していたのかもしれない。本遠征は重度の急性高山病患者を一人も出すことなく無事に終了したが、もし誰かが重い急性高山病に罹つたら、もし誰かが人里離れたBCより奥の地点で重傷を負つたら、と考えると恐ろしい。もっと真剣に準備すべきであつた。この反省は今後にも関わることもある。

遠征自体はアタックに参加はできなかったものの、楽しむことができた。貴重品の盗難にあつて他隊員に迷惑をかけたことについては申し訳ない。しかしそれも、後で振り返ればいい思い出となる。

それまでのルームは事故続きでございました。おとり、暗い雰囲気にも覆われていたが、この遠征をきっかけとして部員も前向きになり、また私個人としても山に対するモチベーションを新たにさせた次第であつた。本遠征は、ルームとしても私個人としても、成功であつたといえるだろう。

した報告会があるというので、北播磨から四時間近くかけ、懐かしい京大へ出かけた。あとで懇談会もあるので、酒が飲めるのも楽しみだつた。参加予定者が少ないとのメールも流れていたが、会場に着いてみると、そうで

もなかった。関東から来られた先輩もいた。

この席で A A C K ニュースレター編集人の前田さんから、現役隊のことで感想を書いてくれと頼まれた。京大山岳部で初登頂したガネツシュ（アンナプルナ南峰）隊で、わたしがメンバーだったからだ。ムムむつかしいと思ったが、断われなかった。

綺麗にまとめられた報告冊子が配られ、会は始まった。登攀にかかるまでの現地の風物なども紹介され、おもしろかった。「荷物を運んでもらった馬」などの話し方に、現代青年のやさしさがこぼれていた。「ガイドの方、コックの方」と話すのにも、年長者・経験者への敬意がすなおに感じられた。

ガネツシュ隊の場合、シエルパは実績のあるベテランがそろっていた。初陣の現役学生は先輩から、雇用者・被雇用者の（英国流の？）関係を保つてなめられないようにと言われていた。胸の中では敬意をはらいながらも、年長者たちと対等以上のスタンスでつきあった。そうして学生たちがトップに立って登っているうちに、よい仲間になっていった。隊員個々の感想も、わたしは聞きたいと思っていた。それは報告会の最後に、ちゃんと用意されていた。報告冊子にも書かれており、初々しくてさわやかだった。

今回の初登頂がこれまでと違うのは、現役学生だけの隊だったことだ。留年も前提とはせず、国内山行の延長のようにして、自分たちだけで「私たちの山」を手中にした。このスタイルは、評価できる。

懇談会に席を移した。冒頭、司会の部員が

一気に自分で乾杯の音頭をとった。幸島山岳部長がわたしの横で苦笑。慣習を知らなかった若い頃のわたしだって、同じだったろうとほほえましかった。

色々な初登頂がある。それぞれの初登頂にかけた情熱やエネルギーの量・質にも色々ある。またそれが、のちの人生に与えた影響も色々だ。わたし自身の中にも、ガネツシュとヤルン・カン、また本業の氷河調査などのついでにできたチベットや南極などでの色々な初登頂がある。

ザンスカールの未踏峰登山

(京大山岳部ヌガツオ・カンリ (六〇八〇m) 初登頂によせて)

阪本公一

京大山岳部の現役諸君が二七年ぶりに、ヒマラヤの未踏峰登山に挑戦する計画を実行し、事故なく無事初登頂を成し遂げた事を、心より祝いたい。今回の京大山岳部の初登頂達成までには、彼らなりに紆余曲折のドラマがあった。何度も挫折しかけた遠征隊を、必死に立ち直らせ、現地の山へ導いたのは、彼らのヒマラヤ未踏峰に対する大きな夢とチャレンジ精神でなかったらうかと思う。

私がインド・ヒマラヤ北西部のザンスカールの未踏峰探査をやり始めてから、既に六隊が私達が見つけてきた知られざる六〇〇〇m 台の未踏峰を目指して遠征に出かけた。京大

自分史のなかで初めての初登頂は、誰にとつても特別な意味があるだろう。わたしの場合はガネツシュが、行方は定かではなかったが、後の人生への軌道を敷くイベントになった。

ガネツシュからほぼ半世紀を経ても、ザンスカルにめざしたものが初登頂であったことは時代を超えて共通だ。それが彼らの自分史の中に、これからのように残っていくのだろうか。あれこれ思いを巡らせながら、心地よい時を過ごすことができた。

山岳部もその一つである。

二〇〇九年に私達が探査したレルー谷の未踏峰には、私の発表したザンスカール未踏峰探査の記録を読んで三隊が出かけた。レルー谷の右股の未踏峰 P611 (R8) に日本勤労者山岳連盟の長野マスターズの隊が、左股の奥の未踏峰 P6008 (R24) にはスイス隊が、そして支谷の Western Valley の未踏峰 P6177 (R7) には英国の Imperial College London 隊が挑戦し、それぞれが成果を上げてきた。

二〇一一年夏に、私達はレナック谷とギアブル谷の未踏峰探査に出かけたが、京大山岳部の現役諸君が同年五月に私の家にやってきて、適当な魅力的な未踏峰が見つかったら是非京大山岳部に初登頂のチャンスを与えて欲しいとのプロポーズを受けた。

そのあと、六月になって日本山岳会の理事として学生会員の世話をされている古野淳と

んと中山茂樹さん（AACCK会員）からも、学生達に適した未踏峰が見つければ是非日本山岳会にも紹介して欲しいとの要請を受けた。現地へ行く前からの未踏峰紹介予約で、いささか気の重たい遠征ではあったが、レナック谷及びギアブル谷は、期待以上に素晴らしい谷で、魅力的な山々を相当数見つける事が出来た。

学生諸君には、彼らの実力と経験に見合う未踏峰が良かろうと考え、京大山岳部には、レナック谷の左股の秀峰 P6070 (L15) を第一候補として紹介し、予備にその対岸の P6080 (L13) を推薦した。日本山岳会の学生諸君には、レナック谷右股の第一氷河奥の P6165 (L10) を第一候補とし予備にその横の P6045 (L11) を推薦した。両隊共に、一月中旬に IMF に登山許可を申請した。

アメリカ山岳会の友人で元 The American Alpine Journal の編集長であった Christian Beckwith さんから一月中旬にメールがきて、彼の住んでいるワイオミングのグランド・テトン近辺のクライマーで運営している山と冒険関係のブログ「Outerlocal」に、私達のザンスカール未踏峰探査の記録を掲載してくれと頼まれ投稿した。一月に始めに、スコットランド人のクライマーから私にメールが入り、彼の仲間六人で是非ザンスカールの未踏峰を登りに行きたいので、どの山が良いか推薦して欲しいとの依頼メールが飛び込んできた。レルー谷には日本の学生諸君の二隊が未踏峰登山に行く計画があるので、隣のギアブル谷の未踏峰がどうかと勧めたところ、

ギアブル谷の支谷であるナムカ谷の奥の未踏峰 P6115 (G22) と P6005 (G18) の二峰に挑戦したいと二月になって連絡してきた。彼らはネパールやアラスカの山にも登っている五〇〜六〇歳台のベテラン・クライマーで、その後もテキパキと登山許可の申請等の準備も進めていた。やはり経験と実力が伴った遠征隊で、相当難しいと思われた岩峰の P6115 (G22) に見事な初登頂した。P6005 (G18) にも挑戦しようとしたらしいが、ハイポーターの一人がヒドン・クレバスに滑落し重傷するという事故の為 P6005 (G18) はやむなく断念したらしい。

京大山岳部の現役諸君がレナック谷左股の P6080 (L13) に見事に初登頂して、「ヌガツオ・カンリ」と命名し、IMF から正式な承認を貰えたことは大変喜ばしいことである。又、事故もなく全員無事に帰国した事は大変嬉しいことだ。

しかし、彼らの初登頂の裏には、綱渡り的な幸運が重なって、ようやく今回のザンスカールの未踏峰初登頂の成功に結びついた。とはいえ、彼ら自身が謙虚に反省すべき事実関係を、今後の京大山岳部の海外遠征の為に、私は敢えて付記しておく。

私達がザンスカール未踏峰探査から帰国した後、一〇月中頃から、京大山岳部の現役諸君は情報収集の為に、何度か我が家を訪れてきた。現地の未踏峰の状況や、IMF への登山許可の申請の仕方、現地エージェントとの費用の交渉等々の基礎知識を出来るだけきめ細かく彼らに情報提供してきた。更に、ヒマ

ラヤ遠征にはチーム・ワークが非常に大切であり、遠征隊員間の情報は常に共有することが極めて重要なことを口やかましく教えた。民間企業では「報告」「連絡」「相談」の「ホーレンソウ」と言われる基本姿勢が最も厳しく教育されるが、ヒマラヤ登山でも同じような「ホーレンソウ」の姿勢が非常に大切なことを何度も伝えた。

四月末になって、それまで隊長で遠征に行く予定であった某君が突然遠征不参加を表明し、二〇一二年京都大学ザンスカール遠征隊は崩壊寸前となった。荻原君と森本君が慌てふためいて、私に相談にきたが、それまでの隊長候補との事務連絡は殆ど出来ていない状態であった。一二月末から十分準備期間があったにもかかわらず、隊長候補であった某君が遠征不参加を表明した四月末まで、隊員間の横の連絡がほとんど出来ておらず、装備、食料、薬品や日本山岳協会の海外登山共済の申請も放置されたままの状態であったようだ。

山岳部長の幸島さんも、海外助成金の申請を受けた AACCK 会長の松林さんも、こんな状態では、とても遠征隊を出すのは無理だと困惑されている雰囲気であった。二〇一一年初めから早く申請するようにと現役諸君に指示していた AACCK の海外助成金の申請書もチャランポランな遠征計画書を提出して、審査委員長の横山宏太郎さんから書類受理を拒否される始末であったらしい。

五月始めに、荻原君と森本君が私の家に相談にきて、「ザンスカールの未踏峰登山には

是非行きたい」と彼らのヒマラヤ遠征に対するあつい情熱を告げられたので、出来るだけ支援してやろうと彼らをバック・アップすることにした。しかし、幸島さんや、松林さん、横山さんや私達の忠告や指導を真剣に吸収して、隊員間の意思疎通をよくとって、テキパキと遠征準備しようとの気構えを欠く面がその後も多々あった。

八月五日に、遠征隊員四名が拙宅にやってきた時、「インドでは何が起こるか解らない。特にデリーは何でもありの気の許せない都会だから、現金やパスポート等の貴重品は必ず胴巻きに入れて持ち歩くように。」と厳しく注意した。にもかかわらず、注意散漫な彼らは私の言葉を聞き流すだけで、遠征隊として、遠征の注意事項や心構えも隊員間で十分に打ちあわせもせずにインドに出発した模様。デリー到着直後にサブザックに現金やパスポートを無造作に入れてデリーの街に歩いていった隊員が、デリーの街で見事に四〇万円とパスポートを盗まれてしまった。幸いに現地エージェントの協力とサポートで、パスポートの再発行も約一週間で完了し、資金面の面倒もエージェントにバック・アップして貰って遠征を続けることが出来たが、非常に恥づかしいことである。

こんな気のゆるんだ状態で、遠征を続けて事故が起こらないかと、大変心配した。現地エージェントのツワン氏及び紗智夫人には、学生が無謀な修正登山計画で登ろうとしたら、厳しく指導して欲しいと、レーの同社に何度も連絡をとり協力を御願いした。

ヒマラヤ遠征に対する彼らの情熱だけで、何とか無事故で未踏峰登山を達成出来たが、ヒマラヤ遠征隊としては決してほめられた遠征隊ではなかったことを、彼ら自身が謙虚に反省して、今後の京大山岳部現役遠征に生かして欲しい次第である。

日本山岳会学生部のザンスカール遠征隊は、五大学からの学生五人の参加する混成部隊であった。日頃の接触がないだけに、チーム・ワークづくりの為に隊員間のコミュニケーションの確立に全員が気を配り、一生懸命努力をしたらしく、大変まとまりの良い遠征隊であった。お世話になる日本山岳会の古野淳理事や中山茂樹理事の指導や私からの情報も、きちんと各隊員がお互いにきめ細かい連絡をとって把握し、遠征準備を非常にスムーズに行っていた。帰国後、翌日又は翌々日には、「阪本さん、無事帰国しました。楽しい遠征を堪能してきました。有り難うございました。」阪本さんの御指導のお陰で、素晴らしい未踏峰登山をエンジョイしてきました。」等々、全隊員が私の自宅にわざわざ電話してくれたのは、驚くと同時に素晴らしいチーム・ワークのとれた遠征隊だと感服した。

近年ラダックやザンスカールで、無許可違法登山が激増しており、インド・ヒマラヤの登山管理をインド政府から委託されている IMF (Indian Mountaineering Foundation) も頭を痛めている。昨夏、ザンスカールの未踏峰を登りに行った京大山岳部も日本山岳部学生部の遠征隊も、彼らの登頂した P6080

(L13) や P6165 (L10) の頂上に誰かが既に登ったらしき痕跡を発見した。IMF の登山記録には、これまで登山許可を取得して両山に登りに行った遠征隊はないので、勿論未踏峰の山として残っており、IMF は京大及び日本山岳会の初登頂であることを正式に確認したが、若い彼らには大きなショックであったであろう。

無許可違法登山は、従来はインド人か欧州人の無節操なクライマーがやっているのとは言われてきたが、昨年にはついに日本人のプロガイドが堂々と公募客を連れてラダックで無許可違法登山をしている事が発覚した。

日本山岳ガイド協会(谷垣禎一会長)所属の平岡竜石というガイドが、ニュージランド人のガイド Mr. Jamie McGuiness と手を組んで、意図的な無許可違法登山をラダックの Leh 郊外の山 Gongona (六三〇〇m) と Gyap Peak (六一〇八m) で実施した。インド政府は、インド・ヒマラヤの山を登る場合には、外国人は必ず(一) IMF に申請して登山許可を取得すること、(二) 登山をする場合は通常の観光ビザ (Tourist Visa) での入国は許可されず、IMF から遠征隊の属する国の在インド大使館に送付される許可書に基づき登山用の X-mountainering Visa の取得が義務づけられており(特例としてインド政府が認定した一〇四の Open Peaks に限り Tourist Visa での登山が可能)、更に(三) 遠征隊は必ずインド政府の指定するリエゾン・オフィサーの同行が義務づけられている。これらの基本的な規則は IMF の Regulations

に詳しく記載されており、英語が読める人間なら誰でも解るようになってる。

インドは永年パキスタンと中国との国境紛争が続いている国なので、山岳遭難事故が発生しても、民間のヘリコプターでの救助は出来ない。事故が発生してヘリコプターによる救出が必要な時は、遠征隊は必ず所属する自国の在デリー大使館を通じて、インド外務省や国防省にヘリコプター救助の要請をしなければならぬ。当然インド政府当局はIMFへ登山許可の有無を問い合わせるので、遠征隊はかならず遠征隊が現地に出発するまでに当該大使館に出頭して、登山計画書を提出しての遠征出発の報告をするようにと各国の遠征隊にRegulationで要請している。昨夏の京大山岳部ザンスカール遠征隊も日本山岳会学生会ザンスカール遠征隊も、デリー到着後在デリー日本大使館を訪問し遠征計画書を提出し、且つ遠征後も大使館を訪れて遠征終了報告を行っている。

平岡竜石なるガイドは、彼のブログで次のような甘言で、公募客を募っていた。

「ラダック最大の湖、青く輝くパンゴン湖がかかえ、その周囲には六〇〇〇m峰が立ち並びます。過去に正式な登山隊の記録は無く、全ての山が未踏峰の可能性にあります。アプローチのルートも、BCの位置も、大まかにしか決めていません。登る山もいくつかの候補の中から、現場で山を見ながら決めていきます。少ない情報を頼りに、未踏の六〇〇〇m峰を探検します」。まるで、かつて気ままに自由に登山ができるような宣伝文句である。

GongmaやGyap Peakのある山域は、一昨年まで外国人の登山は許可されておらずITBT (Indo Tibet Border Police) インド・チベット国境警備隊)のみがトレーニンングの入山が許されていたので、今もかなりの未踏峰が残っている。歩いていけば登れる易しい山が多いが、インド・ヒマラヤの他の山と同様に外国人は正式な登山許可を取得し、インド政府からX-mountaineering Visaをとって、政府指定のリエゾン・オフィサーを同行しての遠征をせねばならないことは当然のことである。IMFへの申請書には、詳しいDaywise Itineraryの貼附が必要で、更に目標の山を記載した地図、及び登攀ルートの明記も義務づけられていて、許可取得にはかなりの日数があるのが通常。

平岡竜石プロの宣伝文句にあるような、登る山も決めてない、アプローチのルートもBCの位置も決めていない遠征隊などは、通常あり得ない。この文章だけを見ても、悪質なプロ・ガイドなることが解ります。AACK会員の某氏が、悪質な平岡竜石プロの甘言にまんまと騙され、公募隊の客として参加してしまいました。彼の登山報告をブログで読んで、リエゾン・オフィサーも同行しておらず、又X-mountaineering Visaもとらずに不法入国したらしいことを知って、平岡隊の実態を確かめる為にIMFに問い合わせたら、やはり登山申請など全く無かったとの返事。

更に今夏私が出かける予定のTso Moriri 近辺の山の情報をインターネットで調べていたら、二〇一一年夏に平岡竜石プロガイド

の公募登山でTso MoririのLungser Kangri (六六六六m)に登ってきたという公募客のブログに遭遇。この記録にも、リエゾン・オフィサーの同行は明記されていなかった。IMFに問い合わせたところMr. Hiraka Ryusekiには登山許可を発行した記録が無いとの返事だった。要するに、この人は、常時無許可違法登山をやっている常習犯なることが解ってきた次第。

私の話を聞いた日本山岳ガイド協会所属の真面目で優秀なプロ・ガイドが激怒し、平岡氏のような客を騙し、インド政府の規則も無視するようなガイドは、ガイド協会の恥さらしだとガイド協会に文章で抗議をされました。しかし、平岡氏から「私もニュージーランドのガイドの客として公募登山に参加しただけで、責任は全く無い」との説明を受けた日本山岳ガイド協会の理事長や理事は、「ハイそうですか」と聞くだけで何の対処もしなかったそうである。プロのガイド協会の理事ならインド・ヒマラヤの規則も勉強していないとは思えず、こんな出鱈目な事ではまともな協会運営は出来る筈がない、実になさけない協会ですと某プロ・ガイドは嘆いておられた。もし、現地で遭難事故が起こった時、無許可登山の場合でも、迅速なヘリコプター救助要請が出来るのでしょうか？ 正式なビザを取得していなければ、公募登山の顧客も不法入国で逮捕され、国外追放になる不始末になる恐れがあるのに、お客を世話せねばならないプロ・ガイドがそんな無責任なことでは良いんでしょうかねと、その真面目なガ

イド氏は協会の不誠実な態度に憤慨されていた。

無許可登山が、単に初登頂が認められるとかどうかなどの問題だけではないことを、認識していない人がまだまだ多いような気がします。

第二三回雲南懇話会(二〇一二年二月一日開催)における講演概要とコメント

安仁屋政武、前田栄三

①「ラダック、チベット密教の地を訪問して、二〇一二年」―ゴンパと祭り、インドヒマラヤ／ザンスカールの未踏峰 紹介―

AACK 芝田 正樹

二〇一二年七月、阪本公一会員をリーダーとする一行四人が、インド北西部にある未知の谷、テマサ谷・ゴンペ谷・ハプタル谷を踏査。標高六〇〇〇m前後の未踏峰二〇座を同定。Zanskarの山と花、「小チベット」と称されるラダック、そのチベット密教の寺院と祭り、一妻多夫と二三歳の少女の剃髪、チベット難民問題等、言及した。「花」の同定では、並河治会員のご指導をいただいたという。

②「インドヒマラヤ、ナンダデビ山群カランカ峰(六九三―m) 北壁初登攀」―二〇〇九年第一七回ピオレドール授賞、そして今―

IC I石井スポーツ(株)、明治大学炉辺会

天野 和明
演者は、二〇〇八年九月、GIRI GIRI BOYSという名の下に三人(天野、佐藤祐介、一村文隆)でカランカ峰北壁初登攀を行い、日本人として初めて第一七回ピオレドール賞を受賞した。彼はローツェ日本人無酸素初登頂を含む八〇〇〇m峰六座登頂の実績を持ち、夏には富士山公認ガイドとしての顔も持つ。

自己紹介で、初冬の富士山合宿で使用した旧式テントの写真、その合宿を終えて下山中の(特に一&二年生の旧式装備を身に纏った)写真を示しながら、彼が所属していた一九九〇年代の明治大学山岳部の伝統の一端に触れた。装備などは一九五〇―一九六〇年代と変わらず、少々驚いた。話の中で印象に残ったのは山登りにおける「安全と冒険」である。メスナーは山登りを「芸術」と言ったそうだが、これらに関して演者の考え・登山観を披露した。

③「古箏の調べ」―さえずりが聞こえますか。波を感じますか―

古箏演奏

伊藤志津子他

伊藤志津子さんの語り、伊藤さん・森本百合さん・内田律子さんによる古箏演奏が行われた。中国古典楽器「古箏」は二〇〇〇年以上も前から弾かれていて、「秦箏」とも呼ばれていた。弦数が時代と共に一三(唐)、一六(清)、一八、二二、二五と変化している。現在は二一弦が最も普及している。古箏の「曲の特徴」は「地域の特徴」であり、それが「流

派」と呼ばれているが、日本の琴の流派とは異なること等が語られた。古箏演奏五曲と各曲の簡潔な解説が為された。

二〇一一年一月の雲南フィールドワークで訪問した巍山、その巍山古城の城楼で観賞した南紹古楽器演奏団の「服装と演奏」風景が、今回の古箏演奏に繋がった。懇話会初めでのユニークな試みであった。

④「中国(雲南)の南進策」―中国はGMS(Greater Mekong Subregion) 諸国と協調出来るか―

日タイビジネスフォーラム

吉川 和夫

演者は二五年間タイに駐在しメコン川を軸とした東南アジアと中国との関わりを見てきた。

一九九二年、ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ国の五ヶ国と雲南省をメンバーとした地域協力プログラム「GMS」が結成された。同域内の開発(鉄道、道路、港湾の整備など)は、南進を目標む中国にとって好都合であり、中国は積極的に協力をしたが、高圧的、独善的、利己的だった。

経済制裁が解除されたミャンマーを始め、環境が変わり、各国の中国への対応が変わって来た。中国との関連でGMS諸国の動向につき、例示して説明した。

当該諸国に対する欧米、特に日本の協力が、中国に対する抑止力になると指摘した。

中国は援助を通して雲南との繋がりを求め強化してきた。その中で大きな問題となつて

いるのは、中国が下流の国々の協定を無視してメコン川本流に四つのダムを建設したことである。これにより、下流では農業・漁業などの産業に大きなダメージが出ている。また、ダムは土砂を堰き止めるので、いずれは河口の侵食など修復不可能なさまざまな環境問題が噴出することが予想される。

⑤「ヒマラヤ周域における少数民族による草食家畜の放牧方式」——中国東チベット高原とインド国ジャンムー・カシミール州でのヤク・ヒツジ・ヤギの比較——

宮崎大学農学部畜産草地科学科

長谷川 信美

ヒマラヤ山脈周域の高山草原では、少数民族による草食家畜の放牧が行われている。

中国青海省玉樹藏族自治州でチベット族によるヤク、海北藏族自治州で回族によるヤク、インド国ジャンムー・カシミール州でバックラワル族によるヤギ、グッジャル族によるヒツジとウシ、チャンパ族によるヤク・ヤギの放牧方式について、調査を行っている。ヒマラヤ山脈北東部と南西部での家畜種と放牧方式の違い（遊牧・移牧・定置放牧）を、植生と野生動物も含めて紹介した。

演者は標記の研究課題に加えて、南米・パタゴニアのペリト・モレーノ氷河周辺で野生化した牛の行動観察なども行ってきた。数多くのフィールド調査から、一つのデータを現地で行うのに比べて苦労しているかが伝わった。例えば、ヤクにGPSを取り付けてその採餌行動を視覚化したり、放牧地とプ

ロテクト地を比較して放牧の植生への影響を定量的に明らかにしたり、糞を分析してヤクの栄養取得状況を把握するなど、現地の人達が持っている貴重な基礎的データを取得している。この結果、放牧の環境へのインパクトが大きいことが科学的に示された。これらは過放牧、草地劣化などの対策を考える上で重要、基本的な情報となる。

第二四回雲南懇話会の予定

一、日時：二〇一三年三月三〇日（土） 一三時～一七時三〇分

二、場所：JICA研究所（元・国総研）、東京・市ヶ谷

三、内容

（一）「ヒマラヤの自然の聖地、その一」——ブータン東部の女神伝説——
写真家、AACK 小林尚礼

私の京大山岳部

一九六〇年代を中心に

（連載・最終回）

吉野熙道

ヤルン・カン以後

海へ

私は本格的な登山はすっぱりとやめた。たまのスキーと黒部へのイワナ釣りと山菜取りくらいは楽しんだ。あまり悔いはなかった。

（二）「高校生に夢を！ 夢舞台／崑崙の未踏峰へ」——ヤズィックアグル峰（六七七〇m）初登頂の記録（二〇一一年）——

信濃高等学校教職員山岳会、

二〇一一年隊登攀隊長 大西 浩

（三）「ベトナム北部の茶と米食文化」——首都ハノイを中心として——

京都大学 Global COE（親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点） 研究員

長坂 康代

（四）「北の紙の道、南の紙の道」——樹皮紙、ダード・ハンターの残した空白——

文書修復家、（元）吉備国際大学教授

坂本 勇

（五）「中国少数民族の自治と慣習法」——悠久、雄大、多様の大地へ——

山梨学院大学大学院法務研究科、

一橋大学名誉教授 西村幸次郎

だが、しようこりもなく、としか言いようがないが、やがてすぐに今度は外洋ヨットレースにのめりこんでいった。海拔八〇〇〇mの世界から一気にゼロ・メートルへの転落であった。実は山を登りつつも「いつかは海へ」と思い続けていたのだった。その発端は、同級生の栗田靖之（ラーメン）の下宿（実際は一軒の家なのだが）でオダをあげていた時に、

「息子たちを船員に仕立てて、その船でカルカタに行き、汽車に乗ってネパール国境まで着けば、あとは歩いてヒマラヤに行けるぞ」

などと騒いでいた記憶が、いつのまにか頭の中にカサブタのようにこびりついていたせいだったと思われる。他の人間はもちろんそんな病気にはかからなかったから、私だけがよほど特異体質だったのだろう。また私は前橋以来泳ぐのが大好きになり、五〇mくらいの潜水は簡単にできるほどで、岡山の市営プールで子供に潜水して見せて、浮き上がったなら、監視員にどやしつけられた。潜水は危険だし、事故と間違われるので禁止されているのだそう。全然知らなかった。利根川と同じだと思っていた。

ヤルン・カンでのキャラバンの間に西堀先生は、「わしはなあ、吉野、帰ったら息子たちとヨットを作るのや。艇名はヤルン・カンや」と言った。いつとき話はずんだが、登山にとりまぎれてそのまま先生と話す機会はなかった。しかし先生は後にこれを実現させて、三浦半島周辺のクルージングを楽しんでおられたそう。それには、先生がいつも頼んでいた独身の個人タクシー運転手の多田雄幸氏の影響もあったのかもしれない。氏は西堀先生の依頼で、後に記す明治大学の植村直己さんのマッキンレー登山の時に無線連絡係を引き受けた。また、何回も単独世界一周ヨットレースに参加した強者であった。これも後述べるが、私が関係したヨット、太陽の極秘の建造中に、西堀先生の斡旋により、その艇体を見に来た。後年、氏はレース中に、自殺されたと聞いた。あの人でも単独世界一周という圧力には勝てなかったのか、と切ない思いがした。

私は瀬戸内のマリナーに行つては、ヨットのオーナーと話し込んでクルージングに連れて行つてもらふことから始めた。ヨットの世界では、見ず知らずの人間でも海好きとわかれば、名前も聞かずに一緒に船出することが珍しくないのだった。やがてすぐに大型外洋クルーザー・レーサーのクルーとなり、レースに熱中した。独学で小型船舶一級やアマチュア無線の免許も取った。山とはずいぶんちがう海相手の新しい日々は刺激的だった。休みの日はすべて、それ以外の休暇もほとんど海の上、という生活となった。妻は船酔いするためもあつて、ヨット・ウイドウになった。山より複雑多様な世界だったが、ロープワークなど簡単に覚えたり、レース中にロープやセイルがからまった時など、命綱なしに素手で一五mもあるマストを登つてほどこいたり、潜水して船底を磨いたりプロペラ・シャフトにからまったごみを取り除くのは、専ら私が引き受けた。本当のところ、日本人でクルーザーなどを持つている人間のほとんど全部は、必ずしもまじめにヨットを楽しんだり、外洋へ出るのを最大の喜びにしている人とは限らない。ごく一部の人を除いては、金にあかせて見栄だけで、また女の子をはべらせて楽しむためだけの目的でヨットを持つ、くだらないヨット・オーナーも多かった。子供の時から海で鍛えられる機会の多い、白人たちのヨットや帆船への思いのかけらもない、ヘナチョコオーナーが多いのだ。日本人が本質的に外洋に縁がなかったわけでないのは、ある程度は歴史的に証明されていて、必ずしも

鎖国政策が原因ばかりとは言えないのだが、どうも体質的な問題があるのでないかなどと思つている。たとえばヨット王国のニュージーランドでは、白波の立つ日に小学校低学年の子供たちでさえ、港の外にデインギーを繰り出し、日がな一日セイリングを楽しんでいる。波穏やかな瀬戸内でも、多くの日本人は出航を中止する天候なのに、である。

それはともかく、外洋ヨットは山よりもっと難しい技術・知識・経験と、それより何より冒険精神、いや危険を恐れない心が必要とされる世界だった。日本では事ごとあるごとにもっともらしく、「山で死んではいけない」などと言われるが、私はそんなのは嘘だと思つている。そんなことを言つていたら、エベレストなど登れたわけではないではないか！ヨットの艇長の責任は重いし、海の世界での階級・秩序は絶対のものだが、ヨットから海に落ちて死んだりするのはまったく本人だけの責任ということになつているのだ。私の山での生活は実際のところ、わずか一四年に過ぎなかった。ヨットの方がずっと長くなったのだ。どちらかといえば、山の良さとは全然違う海の厳しさが私には合つていたのかもしれないとさえ思うことがある。

ヨット、太陽の太平洋単独横断レース優勝、一九八一年

私が海に通つた三〇年以上の間には、山とは全く違ういろいろな経験をした。

一九八一年の神戸ポートピア記念第三回太平洋単独横断ヨットレースに、チーム「波」

の総括マネージャーとして全体計画、資金集めを担当した。実際の行動としては、第一に資金集め、チーム・メンバーによる設計、世界初のカーボン・ケブラー繊維で成功した艇体の建造とチタン製の舵、まだ試作段階であつた太陽電池パネルの採用、神戸大学工学部教授・平井一正（ポコ）さんの研究室に依頼した世界初の太平洋横断最短コースのシミュレーション、当時NHKニュースセンタ―九時のキャスターであつた小浜惟人先輩に依頼して実現した三人取材チームによる全過程の取材と全国放映など、すべてを取り仕切つた。そしてヨット「太陽」と操縦者の今田福成君を優勝させて、これらをすべて実現した。ヤルン・カンの総予算を上回る資金が必要だつた。このヨット「太陽」は数年前でもまだオーストラリアで走つていて聞いた。この時の資金集めに苦勞していた時に、A A C Kの大先輩林一彦氏を訪ねて、絶対優勝できるのだと援助を依頼した。林さんはA A C K内でももつともこわい先輩として有名だつた。私は氏が長くボイスカウトのお世話もし、船も楽しんでおられたことを知つていたのだ。林さんは、「わかつた。だが、お前自身がレースに出るのなら、全額出そう。」と言つてくれた。しかし、それはできない。そもそも私は、「ベニヤ板で堀江健一さんのマーメイド・クルアの自作艇を作つてもこのレースに出ない。今のようには西宮マリーナに寄生しているヨット乞食では終わりにたくない」

と、どうすれば勝てるかを熱心に私に説明した大阪の今田福成君の熱意と力を認めて、無茶を承知で彼のマネージャーを引き受けたのだ。（こいつはひよつとしたら、本当にやれそうな男だぞ）という勘が働いたのだ。ふだんから私は自分の勘には相当の自信を持つていた。彼は当時、西宮でヨットの整備や、クルー、回航などをしたり、ヨット計器の設計・製作をしたりしていた。また世話する人があつて、定期的に岡山に来てヨット・コーチをしていただつた。私のレース仲間の工学部学生が彼の生徒で、私に彼の話を聞いてくれと言つてきたのだつた。こういう経緯があつたので、林さんの言葉は非常に魅力的であつたが、いくらなんでもそんなわけにはいかなかつた。

また、西堀先生にも会いに行つて、募金協力を依頼するための紹介状を書いてくれるようをお願いをした。先生は、「吉野君、とてもよい話だと思ふけど、残念ながらできない。実は今私は、六大陸の最高峰登頂を目指している明治大学山岳部出身の植村直己君を応援しているのだ。実は、家内と二人でカナダを旅行していた時に、ある田舎の鉄道の駅で、用事ができて荷物をどうしようかと思つていたら、たまたま日本人の若者が目についた。彼に荷物を見てくれるように頼んだのだ。何時間かかかつて用事を済ませて帰つてきたら、彼はずっと待つていてくれたのや。いろいろ話を聞いて彼を助けてやることにした。私がいつもお願いしている個人タクシー運転手の多田雄幸君が無線の

プロだから、彼の登山中の無線係にも頼んだところなのや。金集めも相当手伝うてやらなあかんのや。」

ということだつた。この線もつぶれた。ヨットは帆で走る。近代の帆は木綿製が主流だつた。テントだつて、獣皮と木綿が主流だつた。テント屋はどうか、という単純な発想をした。大阪万博の設営を仕切つた「太陽テント」という会社の可能性を考えた。調べてみると、会長の能村龍太郎という人は大胆な戦略と決断力、技術的に十分な実績を引つ提げのし上がつてきた人らしいことがわかつてきた。当たつてみよう！と思つた。会長には会えないものの、とにかく趣旨を説明できることになり、新大阪駅近くの本社を訪ねた。今田君はボロボロのジーパンで行こうとした。自分の地でお願ひしたいのだ、と言ひ張つた。叱り飛ばして、安物ではあつたがスーツを着せて、散髪もさせて連れて行く始末だつた。総務課の課長さんに、我々が考えている数々の新機軸と優勝の可能性を一生懸命説明して資料を渡して帰つた。数日後丁寧な断りの電話をいただいた。やはり甘くないなと思ひ知らされた。ところが、一週間後、もう一度、今度は東京に来てくれとの電話をもらった。ひよつとしたら、という予感を持つていたが、いきなり会長の能村龍太郎氏が出てきたのは驚いた。二時間ほど我々の計画の細部に渡つて鋭い質問を浴びせられた。しかし私は能村氏が、私が作成して前回大阪で渡した計画書を隅々まで徹底的に検討してくれていたことが理解

できた。たとえこの結果がどうなろうと、そのことだけで満足できる気持ちになって、主役の今田君を差し置いて夢中で、それまでにやってきたこと、これからやるつもりのこと、やれそうなことを話した。

能村さんは急に話題を変えた。

「私はイルカの皮膚は大変面白いと思っていた。彼らが泳ぐ時に、皮膚は非常に弾力的に水の抵抗を逃がすのであんなに早く泳げるらしい。もしも船の船体にああいう構造を使えたら素晴らしいと思うんだ。」

びつくりした。一瞬呆然としたが、この人の発想はいつか実現するだろうと思った。その直後いきなり、

「わかりました。二五〇〇万円提供しますから、自由に使ってください。大阪本社に事務所と電話、担当者を手配します。」

と言われた。正直言って、嘘だろう?! と思うた。さぞ間抜け面だっただろう。細かいことについては何も言われることもなく、ただお札を述べて、岡山に帰った。興奮しすぎたのか、新幹線の中では二人とも口数少なく、特に今田君は責任の重さに打ちひしがれているように見えた。私も敢えて声をかけなかった。しかし私も家に帰ってから、翌朝まで寝られなかった。

大車輪の日が始まった。大学の仕事なんか最低限にまでさぼった。

最大の難関は、カーボンとケブラーをくっつけて軽くて丈夫な艇体を作る接着剤だったが、担当者はなんとかそれに成功した。しかし実際に悪条件化で破損しないことを確認し

ないと、成功とは言えないのだった。それでもこの艇体構造は各国で何回も試みられたのだが、強度不足でレース以前にすべて艇体が破損していたのだ。チタンの舵も同様だった。しかし愛知県の造船場での艇体建造は着々と進み、能村会長も出席してくださった進水式も無事に済んだ。串本沖での試験帆走や調整も予想以上の成功裏に終わった。船積みされてサンフランシスコに運ばれたヨット「太陽」と今田君は、ダントツの優勝候補として注目の的となった。コースと時期を考慮して、追い風ではスピードが出るように、錘の役目をする船底に吊るされているキールを引き上げることができるダガー・キール構造にした。これは結果的には競技ルールに合致せず、キールは固定された。それに加えて、この年の太平洋高気圧の位置がずれたために、シミュレーションで得られた最短時間での太平洋横断新記録樹立はかなわなかったものの、四三日間の帆走後、淡路島洲本沖にフィニッシュした。

NHKのディレクターには、当初の約束通り優勝して全国放映する時には、(当時ヨットの愛好者としても知られていた)森繁久彌氏にナレーションをお願いしてくれ、と頼んでいた。氏は初めのうちは「なんでおれがそんな若造のためのナレーションを?」と言っていたらしいが、フィルムの中のラッシュを見て快く引き受けてくれたようだ。これはNHK総合テレビで「帆走一万キロ」および「波と風と青春と」²⁶として放映された。フィニッシュの号砲を聞いて万歳をした、ガリガリに

やせて真っ黒になった今田君の姿は今でも目に焼き付いている。

私はこの直後の八月末から、一人でペーパル中央部でのサトイモ調査に向かった。今度は本来のわしの仕事やと、意気軒昂であった。

海の凄さと魅力

私は山では、自分やパーティーの仲間を危険にさらしたことはなかった。しかし海ではかなり危ない経験をした。

日本外洋帆走協会とナホトカ市との共催による小樽・ナホトカレースでは日本海で息を吹き返した台風に遭い、七人中五人がダウンする中で、プロのヨット乗りと私の二人だけで舵にしがみついて、弾き飛ばされそうになりながらも逆波を交わしつつなんとか切り抜けた。一瞬でも舵を取り間違えて後ろや横からの大波をくらったら、完全に沈没する状況だった。ぶつ倒れて意識不明になっているクルーの誰かが船底の排水弁を踏みにじつたらしく、積み重なったセイルの下にどんどん海水が入っていたのだ。私がチャートを見に行つた時に、それを見つけて必死に木栓と毛布をねじ込んで浸水を止めた。強風に吹き飛ばされた波頭が砕けて、水玉がコロコロと海面をころがっていった。朝になってやっと陽が射し出した時には、波頭ごとに小さな虹があちこちに広がった。こんなにきれいなものは見たことがない、これで助かったと思つた。この日の夕方、ナホトカのアメリカ湾にフィニッシュした。我々を歓迎するために呼ばれていたモスクワのパレー団の女の子と、

ロシア語で「カチューシャ」や「モスクワ郊外の夕べ」を歌ったり、ロシアのヨット乗りとコサックダンスを踊ったりした。山岳部ではロシア民謡が流行っていて、私はロシア語初級の授業を二回だけ受けて基本的な発音とアルファベットを習い、あとは民謡集で練習して、たいいていのロシア民謡は原語で歌えるようになっていたのだ。

海での遭難

またセミプロのヨット乗りに同行して、二人で沖繩へヨットを回航中、奄美大島北方八〇マイルで舵軸が破損して三〇分で沈没、ライフラフトで漂流後に外国船に救助されたりしたこともあった。この時は、奄美大島へ交配材料としての野生型サトイモを採りに行く予定だったところに、ちょうど沖繩本島へのヨット回航の話聞いた。オーナーは知り合いの人でそのヨットにも乗ったことがあるので、手伝いがてら便乗させてもらったのだ。自費研修だから出張費をもらえるわけでもないし、交通手段も報告することもない。ヨットで食費タダでいけるなら最高だ、というわけだった。

事故に気付いてからなんとか浸水を止めようと手を尽くしたが、大きな船で破損箇所が船底の深い位置であり、その分入ってくる水の圧力は強くて、止めるのは不可能だとすぐにわかった。悪いことに自動操舵用の大きな操舵ギアがひん曲がって破損箇所をますます広げていた。「メーデー、メーデー」と緊急無線で呼びかけたが応答はなく、二台のバツ

テリーはすぐに塩水に浸かって白煙を上げて死んでしまった。私は浸水の状況を適時カメラに撮影した。後で保険金請求に必要だと思ったからだ。その海域は北米航路の真つただ中で、我々のヨットから見える範囲の左右をたくさんの大型船が行き交っていた。しかしいくらマストに登って信号弾を打ち上げても、まったく無視された。真昼間なのに、すべての船はレーダーを見ている船員がいるだけで、目視で航路を見守っている要員は全然ないようだった。後になって、外洋航路の意外な頼りなさを思い知った。親戚の外洋船長から、ベトナム難民などをうかつに拾い上げたりして、会社に損害やトラブルを持ち込むなという秘かな指示さえ出している海運会社もある、ということを知り驚いた。

江戸時代の漂流船の話を読み出した。ジョン万次郎などの例もある。他に全員がミイラ化した遺体となった漁船がアメリカに漂着したこともあった。日本近海から黒潮に流されたら、現在の北米航路沿いにアメリカまで行ってしまわないと納まりがつかないのだ。覚悟を決めた。初めのうちはセイルを他の船が見てくれることを期待して下ろさなかったが、風圧で沈没が早まる危険性を感じて下ろしていた。予備に積んであった期限切れの信号弾セットのあらかたも打ってしまい、残りは一発だけになって、ついにライフラフトに乗り移った。この間にすべての食料はまとめおいたので、沈没直前にラフトに積み込んだ。船体は軸とマスト以外はほとんどが沈ん

でいた。沈む時にマストがラフトに倒れ掛かったり、引き渦に巻き込まれたりしかねないと思つたので、後ろも見ずにただただ小さなオールと手で必死に漕いだ。数一〇秒後にチラッと振り返ったら、もう何も見えなくなっていた。どの位経つたかわからなかったが、気が付いたら、遠くから大きな船が徐々にこちらの方に近寄ってくるように思われた。ヨットを離れる前、北行きの船がだんだん減速しているように見えたのだが、どうもその船が進路を変えてこちらに向かっているらしかった。じつと見ていた。間違いない。こちらに向かっている。そうだ、この際ラフト備え付けの非常食セットを開けてみよう、と思いついた。こんな機会はめつたにあるものじゃないのだ。ほんのわずかずつ入っているレーションを食ってみた。とても少ないしうまいものではなかった。釣り道具は記念品として取っておいた。やがてその船は一〇〇mほど近くまで寄ってきて少し位置を変えて左舷全体をこちらに見せて停止した。でかい船が風を防ぐ位置に停止してくれたのだ。行き届いた配慮に感心した。四万トン位の貨物船だ。船員が何か叫んでいる。よく聞こえないが、身振から、漕いで寄ってこいと言っているのがわかった。黒潮の中だけに波長二〇〇mほどもあるうねりは力強く、しかもラフトはお椀のような形なので、小さなオーラではなかなか進まない。船員が舷門から繩梯子を下ろした。やつと船腹近くに辿り着いた。しかしそれからが大変だった。大きな船だから二〇m以上の梯子登りをしなければ

ならない。これが大層な難物で、岩登りをする人間でもわずか三mほどの梯子にさえ往生する奴が多いのだ。おおかたのヨット乗りなどには到底無理なのだ。相棒が、艇長は自分だから最後にラフトを離れる、などとシャボシャボ抵抗するのを、とにかくお前が先にごとくるところと回転しそうになる。落ちるかもしれないので、私は必死に梯子とラフトが固定するようにふんばった。ラフトは所詮ゴム引きの繊維にすぎないから、鋼鉄の本船の船腹にこすられたら一気に裂けてしまう。遭難救助の証拠として船長に必要だろうと思つたので、ラフトのロープに梯子を縛り付けてから船が上がった。これはパナマ船籍の貨物船で、船長は丁寧なスリ・ランカ人だった。すぐ名瀬保安に無線を入れてくれたが、けしからんことに「名瀬沖まで遭難者を連れてこい」という返事だった。こんな大きな外国船が往復一六〇マイル以上(三〇〇km以上)寄り道したら、船会社にとって燃料代と時間の負担がどれほどになるか、素人だつてわかるはずだ。船会社にはそんな義務はなく、保安庁が迎えに来るべきなのだ。それでも船長は本社に連絡して許可を取ってくれ、北に向かつていた本来の進路を南に変えてくれた。日本の保安庁の代わりに「ありがとうございませう」とお礼を言うと、船長は笑つて「船乗り同士、当たり前だ」と言ってくれた。恥ずかしかった。相棒は英語がだめなので、船長とは私が全部話した。ラフトは引き上げられて倉庫に入れられた。

数時間後海上で保安庁のボートに引き渡され、名瀬の役所で簡単に住所氏名と事情を述べた。すぐ、ヨットのオーナーへの電話連絡を要求した。相棒はヨットの扱いこそ慣れてるが、ややパニック気味で役人との間でトラブルを起こしかねない。すべて私に任せるように言い含めた。相手は洪々ながら電話をかけてくれた。オーナー一家は飛行機で那覇に来る予定だったのだ。事情を説明して陳謝し、この件がマスコミに流れないように工作することをお願いした。彼は倉敷の病院長さんで地元の有力者なのだった。相棒のヨット乗りはとにかく大急ぎで岡山に帰つてオーナーに事情を説明すべきだが、私は、なんとかこのまま本来の仕事をしたい、ついでには、怪我もなく元気なので家内には知らせてくれるな、と頼んだ。彼は、ほんとにそれでいいの？と言つたが、もし彼女が聞いたら、すぐ帰れと言つてしまつてから、そうなつたら残念だ、と説き伏せた。

しかしこの時の保安庁の対応には腹が立つた。三回も聴取が続いたので。違う人間に同じことばかり繰り返して聞かれた。出てくる奴みんな顔が真っ赤で酒臭い。どうも管区のえらいさんが来て酒盛りをやつていたらしい。これでは我々を引き取りに八〇マイルも出てこられるはずもない。完全に職務怠慢である。

テレビのニュースには気を付けていたがどうやら報道はされなかつたようなので、私は安心してバスに乗り、初めて出会った奄美の島を加計呂麻島まで南下しつつ、野生のサト

イモの調査に夢中になった。遭難のことなど全く忘れ去つた。

ところが、機嫌よく帰宅したらとたんに妻にどやしつけられた。遭難のを知つていたのだ。団地の懇意な人が「奥さん、ご主人大変だったですねえ」というので妻が問い返すと、読売新聞の記事を見せてくれたという。その日はよほど事件が少なかったのか、埋め草のように小さく我々の遭難が報じられていたのだ。妻にはとにかく謝つた。しかしこれだけでは済まなかつた。大学の事務局で農学部事務長が「農学部は優雅やなあ。助手がヨットで出張か」と皮肉られたそうで、私は事務長室に呼ばれて事情を聴かれた。説明して、「なんだつたら始末書でも書きましようか？」と言つと、「いや、そんなことをされると大げさになつて困ります」とのこと、この件はうやむやになつた。

中国科学院昆明植物研究所との共同研究など

以下に述べることははっきり言つて書きたくないのだが、これも私の人生にとって重要な転機の一つなので、敢えて記すことにする。ヤルン・カンの報告書の編集がほぼ終わる學術報告書にとりかかつた頃、私の大学の立場には大変難しい問題がふりかかつていた。私の教授は私を岡山に呼んでくれた、生研では上司に当たる人だつたが、仕事上で直接の関係は無かつた。岡山の助手ポストが空いた時には彼の身近には若い後輩もいず、それ以前から生研の内部的な問題でいろいろなことがあり、その辺の事情もあつて、私を岡

山に呼んだのだった。

しかし私と彼との関係は徐々に悪化していった。私の仕事はすべて教授としての彼の手伝いであり、また学生実験指導の一部であったが、彼は明確な指示を出したり指導したりはしない人で、時には四回生の夏休みに入っても、卒論のテーマや実験手法に関して学生が把握しかねているようなことが度々あった。私自身に対する仕事上の指示についてもそのようなことが多く、訊きに行ってもはつきり答えないのだった。私自身の研究テーマなどはもちろん与えてはくれなかった。

そもそも、私が岡山に赴任した直後、彼は私に、当面ここでの仕事に専念して生研や木原スクールとの関係を持たないように、と告げていた。彼と木原先生とはあまりうまくいっていないことは薄々聞いていたので、(そこまで言うのかな)と違和感はあったが、とりあえずはそれに従っていた。だから、個人的に収集したサトイモなどの材料は保存する場所もないから処分せよ、と指示された時も、残念だとは思ったが、京大の同級生に当座の維持・管理の圃場を借りて手放したのだった。ウイルスの病徴が出ていた四系統のみは渡すわけにいかないし、かなり変わった特徴を持つていたので保持した。種子保存可能な採集品も手元に残した。

なぜ彼がこのようなことを私に要求したのか、また木原先生がなぜ私の岡山行きにそれほど反対したのか、当時ははつきりわからなかったが、後になって他の人からの話で理解

した。

とうとう私はこの人は私とは人種が違う(別れよう)と決心した。もちろん学位を取得できる目途などは到底無く、非常につらいことになるのはわかり切っていた。とりあえず独自の研究をすることにして、ブータンで採集したソバを材料に実験を開始したが、どうも進展しそうななかったもので、どうせならサトイモに戻ることにしようとして少くも京都から持ち帰り、ほそぼそと形態観察にとりかかった。岡山周辺の栽培品種の収集も始めた。ヒマラヤの野生型サトイモの多くは加温しないと冬には死んでしまうので、小さなビニール・ハウスを作ったり電熱線で加温したりして、それらの維持には大変苦労した。しかしこれらの系統が、後の私のサトイモ研究の最重要材料になったのだ。

このような状態の私を支えてくれたのは、妻の協力とヨットだけだった。

一九九四年三月に恩師、常脇恒一郎先生のご尽力により、やっと京大の論文博士の学位を取得できた。『Phylogenetic Differentiation of Taro, *Colocasia esculenta* Schott.』という学位論文は、サトイモの形態・生理・生態・遺伝・分子系統分類に関する内容で、永年にわたり一人でこつこつと南西諸島、東南アジア、ネパール、特にヤルン・カンで採集した野生型と栽培型のサトイモ属系統を研究材料としたものだった。まだどうも批判に耐える成果とは言えなかったが、研究者としての私にとっては、この時点で発表しておくべき、ほとんど最後のチャンスであった。

サトイモ研究の契機を与えてくださった木原先生と、サボリ屋の不良学生であった私を最後まで見守ってくださった常脇先生にはどれほど感謝しても足りない。ここに改めてお礼を申し上げたい。

一九九五年中国雲南省昆明市にある中国科学院昆明植物研究所(KIB)で開催された、第三回国際サトイモ学会で研究発表をした。その時に意気投合した分類学の大家である李恒(リ・ハン)教授や数人の若手研究者と学会終了後すぐにフィールド・ワークにでかけた。以来、毎年昆明を訪れてサトイモ科植物やムギ類を中心とした共同研究を行ってきた。サトイモの遺伝学研究などではろくな論文も書けず、従って研究費もつかず、全部自費での海外研修であったが、そのうち少しずつ研究費ももらえるようになり、やがてKIBと岡山大学との間の国際交流協定締結にまでこぎつけられた。これについては、当時農学部長で、次いで岡山大学副学長となった、京大農学部で一年先輩であった森林生態学の千葉喬三教授のご理解と強力な支援をいただいた。私のそれまでの地味な活動に大きな転機をもたらしてくれたもので、感謝のしようもない。そのうちに岡大以外の研究機関も含めた共同研究と研究者・学生の国際交流を多数プロモートするようになり、現在に至っている。

私が扱ってきた主な研究テーマと仕事は、コムギ・オオムギ・メロン・キュウリ・サトイモ、の遺伝資源収集と保存、最新の技術による遺伝学的解析であり、最近では雲南省の

遺伝資源が有する抗ガン・抗マラリア作用の解析とその合成に關する、研究者・学生の交流、国際シンポジウムの企画・開催が主なものであり、また望天樹 *Dipterocarpaceae* での収集と分類、ウルシやヤナギおよびその他の野生植物の分類研究のプロモートなどがある。とくに研究者と学生の長期・短期の滞在交流には力を注いできた。

退官の一年五ヶ月前に、妻にガネッシュとヤルン・カンを見せるためにネパールに行った。結婚する前に、「いつか、わしの登ったガネッシュとヒマラヤの山を見せてあげる」と約束していた。実現に四五年かかった。



夫婦でガネッシュと 2004年11月

その直後の二〇〇五年一月に、中咽頭と食道にガンが同時発生し、手術・治療・再発を繰り返してきた。最近一年半以上再発を見ていなかったが、七ヶ月前にまた再発し化学療法を続けている。天は今しばらくの余命を与えてくれているようで、目下の経過は急激な悪化は無いようだが、毎月の抗がん剤の点滴と手術後の食道狭窄を矯正するバルーン拡張手術はしばらく続けねばならない。これ以上の外科的手術はもうらん放射線療法もできない状態である。副作用がきつくなったり抗がん剤が効かなくなったりするのは時間の問題だが、その時どうするかはその時に決めたらよいと思っっている。多分（これじゃないでしょう）と思っ、酒も煙草も思う存分やることになるだろう。どちらも大好きだし、本当にうまいと思う。煙草はパイプにする、酒は泡盛と中国の白酒（バイチュー）、ワイン、ウイスキー、ブランデーにしよう、と楽しみにしている。そないなこと、ほんまにようやるか？と聞かれたら自信はないが、（それは多分家族の抵抗があるからだろうと分かっているからなのだが）私は本質的にエピキュリアンで成り行き任せでわがままな人間なので、そうなるような気がしている。

二〇〇六年三月に岡山大学農学部を助教授で定年退職した後、それまでの活動が認められて、KIBに赴任した。国内で長い間万年助手で過ごしてからやっと助教授にしてみたい、数年後に定年退職し、外国でとにかくプロフェッサーと呼ばれるようになった皮肉に、（あんまり例は無いだろうな）と、自分

ながら苦笑するしかなかった。

昆明に引越す前には、自分のヨット、ダウニング・プリンセスも完全に新品同様に整備した上で、友人に係留権をも含めて無償であげた。今彼女は同じ艇名のまま元気に瀬戸内を走っている。懐かしいが、彼女を見に行ったり、操船したいとは思わない。新オーナーの人たちは、いつでも乗りに来てくださーい、と言ってくれるが、自分が乗ったらなんとなく押しつけがましいような気がするのだ。自分の中では、今はヒマラヤのように通り過ぎてきた世界にしようと思っっているのかもしれない。

二〇一〇年九月に帰国するまで四年近く、妻と愛犬ともども雲南での仕事と生活を堪能した。今でも年二、三回は昆明に行く。サトイモ研究は不完全で心残りではあるが一応終わりにしたので、もうしばらくは、岡山の最新のプロウ品種とその栽培技術を昆明の中国の友人の農場に植え付けるのが目的である。五年生き延びたら可能だろうと胸算用している。

サトイモ研究に関しては、堀田満他編「イモとヒト」²⁹⁾などに比較的まとめることができた。また意外にも編集者のご理解を得られて、小学生や中学生向きに、サトイモの栽培法や植物としての特性、面白さを数一〇ページにまとめて、しかも先生たちには遺伝学的知識の一端まで簡単に伝える目的の絵本、「サトイモの絵本」³⁰⁾を出版できたのはよかつたと思っっている。

末尾ながら、浅学無能の私を長い間助けてくださった多くの友人、京大の先生、先輩と仲間に対して、心から感謝の気持ちをお伝えしたい。

自分勝手にわがままを押し通してきた私に常に見守って助けてくれた、妻、家族に対しては、ただただ、ありがとうと言いたい。

引用文献・参考資料

(25) NHK総合第1テレビ…「帆走1万キロ」、1981.8.19.全国放映。

(26) NHK総合第1テレビ…「波と風と青春」と、1981.8.関西地区放映。

(27) 吉野熙道…「サトイモー進化の一断面と根栽農業における位置」、吉田集而・堀田満・印東道子 編「イモとヒト」、平凡社、東京、2003。

(28) 吉野熙道…「サトイモの絵本」、農山漁村文化協会、東京、2007年。

謝辞

上記の文献・資料のうち、京大山岳部報告の全ては上田豊（ポッポ）氏からのコピー提供による。また鳳翔山岳会、大阪市大隊に関する情報も全て、彼がメールで提供してくれた。彼とはガネスシユ、ヤルン・カンともに苦勞をともした。ここに彼に対して心からの感謝の気持ちを表わしたい。

多くの人たちにとつて懐かしい、若かりし昔の記憶をつづった品々はたくさん残っているにちがいない。それらは私のような状態にまで四散、消滅させてはいないであろうが、

ほぼ半世紀もの時間が経った今、再び引つ張り出すには多大な労力と時間を要するのだ。これまで私もある程度、心当たりのある人たちに資料提供の依頼を試みたのだが、それに思い至つて諦めた。

その中で、ポッポはそれこそアツという間にたくさん資料と情報を送ってくれた。それもあとで聞いたところによると、目にトラブルがあつて、資料探しのような作業には大変な苦勞がある中でのことだったという。いくら昔のよしみとはいいながら、本当に頭が下がる。改めて、幾重にもありがとうと言いたい。

片岡泰彦氏は剣沢大滝内部の登攀ルート図の引用を快諾してくださつた。感謝いたします。また以下に、本文中に名前を挙げその後物故したA A C K名誉会員および山岳部出身者の名前を記し、この方々の活躍と山岳部への貢献、個人への友情に対して感謝し、心からの哀悼の意を捧げる。

杉野弘恭は一九六六年、アメリカで客死した。

宮木靖雅は東レに在職中、東海大学よりの委嘱を受け北極圏踏査隊を組織し、一九七一年隊長として活動中に隊員一名とともに行方不明となつた。のちに遺体が発見された。

松田隆雄は一九七三年、ヤルン・カンの初登頂に成功し、頂上から下山中に転落・行方不明となつた。

高木真一は一九七四年、K12初登頂直後遭難死した。

富田幸次郎と浅野潔はヤルン・カンから帰つた翌年一九七四年、奥美濃入山中に車の事故で死亡した。

虎見厚介は一九八二年、病没した。
樋口明生は一九八三年、病没した。

桑原武夫は一九八八年、病没した。
西堀栄三郎は一九八九年、病没した。

田附重夫は一九八九年、病没した。
今西錦司は一九九二年、病没した。

西岡京二は一九九二年、病没した。
中尾佐助は一九九三年、病没した。

田村孝夫は一九九四年、病没した。
森本陸世は二〇〇〇年、スキー山行中に病没した。

岩瀬時郎は二〇〇二年、病没した。
梅棹忠夫は二〇一一年、病没した。

ヤルン・カン以後の私の個人的な人生の一部まで長々と述べさせていただきましたが、これも私が山岳部で学んだ生き方を自分なりに育ててきた大事な一部でありますので、ご寛容ください。私の心の中では、今に至るまで、何もかも忘れて山に登っていた頃の気持ちが生きてきたのです。

このような無茶苦茶な男を支えてくれた妻・京子はすでに昨年他界してしまいました。私のような男に会わずに、もつと優れた人と出会っていたら、彼女は才能の全てを發揮してはるかにすばらしい人生を送れただろうに、と悔やまざるを得ません。今ではただ心からの愛をもって感謝するばかりです。

吉野コッペ

AAACK初期会長の 就任時期について

酒井敏明

八〇年余の歴史をもつ山岳会として過去を振り返るとき、会長の重責を全うされた方々への敬意と感謝とを忘れることがあつてはならないでしょう。ただ、最初期の会長については交代の時期など必ずしも明確でないと感じていたので、事務局長竹田晋也さんをわざわざ会への保存資料にあたり、五〇年の節目に本会の歴史の労作を発表してくれた斎藤清明さんからも知恵をお借りして、左に示す表を作成しました。こんなことは自明のことであるはずですが、現実はそのようではなかったのです。

(旧) 社団法人京都大学学士山岳会が設

	氏名	任期
初代	郡場 寛	1931.5 ~ 1932
2代	木原 均	1932 ~ 1958.1
3代	桑原 武夫	1958.1 ~ 1963.5
4代	今西 錦司	1963.1 ~ 1967.5
5代	多田 政忠	1967.5 ~ 1972.5
6代	四手井 綱英	1972.5 ~ 1976.5
7代	近藤 良夫	1976.5 ~ 1987.5
8代	堀 了平	1987.5 ~ 1993.5
9代	高村 奉樹	1993.5 ~ 1997.5
10代	上尾庄 一郎	1997.5 ~ 2003.5
11代	木村 雅昭	2003.5 ~ 2007.5
12代	上田 豊	2007.5 ~ 2011.5
13代	松林 公蔵	2011.5 ~

立されたのは一九六〇年一月一日（認可一九五九年二月二六日、登記一九六〇年一月四日）であり、これ以降毎年事業報告その他が文部省宛提出されていますので、この時代については既定であります。問題はその前身である「アカデミッシェルアルペンクルプキョウト」の創設（昭和六年）当時、および第二次大戦後活動が実質的には休止していた期間について、交代の時期が必ずしも明確でなかったのです。

以下に若干の説明を加えますが、敬称を略させていただくことをお許しください。

一、前身のアカデミッシェルアルペンクルプが京都帝大理学部教授で旅行部部長を務めていた郡場寛博士（一八八二～一九六七）を会長として一九三一年五月二四日に発足した経緯については『ヒマラヤへの道』（注1）第四章に明記されています。郡場はそれ以前から就任していた（国の）学術研究会議会員の資格で一九三二年に欧州、中米、南米、北米など長期の視察旅行に出ました。一方で、一九三二年一月発行の『AAACK会報』第一号は、クラブ創立前後の事情を報告するとともに、現在の役員として会長木原均と記しています。創立の時木原均（一八九三～一九八六）は農学部教授を務めていました。郡場はクラブ会長に就いてまもなく外国出張の命を受けて京都をしばらく離れざるを得なくなり、木原に後事を託したものと推察することができま

二、木原会長の時代には戦前の白頭山巖冬期遠征、北部大興安嶺縦断、戦後にアンナプル

ナIV峰遠征などがおこなわれました。元會長近藤良夫の文（注2）に「……一九五二年にはAAACKが再建され、アンナプルナ遠征に向けての活動がはじまった……」とあります。五一年末に木原と西堀栄三郎がインドに渡り、五二年後者のネパール訪問から日本のヒマラヤ遠征計画がスタートしました。木原会長は一九五五年にはみずから京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊を率いてパキスタン、アフガニスタン、イランの科学調査を展開しました。

三、木原は一九五六年三月に定年退官、前年から就任していた国立遺伝学研究所長の職責をはたすため横浜に移り住みます。そのあとAAACKはチョゴリザ計画の具体化にとまじ、一九五八年一月の委員会で桑原武夫教授（一九〇四～一九八八）を（所要のため欠席していたのですが）新しい会長に決定しました。（注3）このあとの歴代会長は社団法人AAACKの毎年の報告によって知ることができます。

この一文はここ数年間われわれを悩ましつづけた例の「一般社団法人」とは関わりがない話です。

注1 今西錦司編『ヒマラヤへの道』一九八八 中央公論社

注2 近藤良夫「多田政忠先生を偲んで」

AAACK Newsletter 4: p5

注3 桑原武夫『チョゴリザ登頂』一九五九

文藝春秋新社 pp7-13

中国登山協会元主席史占春氏 占春氏
(AACK名誉会員) 死去

中国登山協会史占春元主席の葬儀
に参列

岩坪五郎

二〇一三年一月二八日、入院中のY(斎藤惇生)さんより史占春中国登山協会元主席の訃報を知らせる電話があった。昨二七日一六時になくなったという(享年八五歳)。私は葬儀に参列したいですと答えた。かねがねそのようにおもっていたのである。Yさんは参加できないので、結果的に、AACK会長の要請を受け、わたしはAACK代表として告別式に参列することになった。中国交流部長の趙建軍さんに、告別式の予定が決まりしだい連絡されたいとメールをおくった。同志社の平林克敏さんに電話した。彼は日本山岳会代表、同志社大学山岳会代表として出席する。同行を約し、私は格安航空券を購入することになった。二人で往復、八八二四〇円であった。格安でなければ、倍以上かかる。

二月一日深夜、中国東方航空便で北京着。東京からは日本山岳協会会長の神崎忠雄さんが来ていた。わたしたち三名は、趙建軍、李豪傑の交流部員に迎えられ、体育館路の金糧飯店に入った。



路上、自転車がほとんどなく、自動車ばかりで、それがクラクションを鳴らさないのに驚いた。自転車に乗っていた人たちが、自動車に乗り換えたらしい。登山協会のスタッフたちもみな自動車通勤だという。警戒していたスモッグがない。天安門広場の街灯がキラキラしている。昨日、雪と風があり、スモッグは日本に輸出したと冗談をいわれた。翌朝、ホテル近辺の残雪をみたが、黒いとはおもわれなかった。

二月二日。告別式は午前一〇時から、北京八宝山殯儀館でいとなまれた。つまり高級人士の遺体とのおわかれ会場である。小学校の運動場くらいに面積に、講堂のような建物があり、そこに三室のおわかれ会場がある。

九時四十分ころ、おわかれ室の横の控え室で、張玉蘭未亡人と長男の史岩夫妻にご挨拶をした。未亡人は車椅子だったけれど、昔のとりの美人であった。

いよいよ告別式の開始である。先頭列は式の主催者である国家体育总局元局長の于再清さんと二人の現副局長。二列目は中国登山協会主席の李致新さんと続川副主席らが整列。彼らは主催者側である。ついで私たちで、右から、日本山岳会代表、日本山岳協会代表、京都大学学士山岳会代表、左端に通訳として趙建軍さんが並ぶ。そのあと二〇列ほどあったが、外国からの参列者は私たちだけであった。梅里雪山遭難のおり、京都での葬儀に列席した老史(私たちは史占春をそうよんでいた)は私のモーニングをえらくひがんで、何度も上衣やズボンを引つ張っていたので、それを着用してきたのだが、みなオーヴァを着たままでぬぐとところがなかった。

告別式場は二〇×三〇メートルくらいの部屋で、中央の花壇の上に老史の遺体が頭を奥に横たわっている。上質の人民服を着ている。胸からしたは五星紅旗ではなく、鎌と槌の紅旗で覆われている。これは中国共産党の党旗だとのことであった。正面には老史の顔が幻灯でうつされており、右側は東京地方での葬儀に使われるような花輪が林立している。花

輪にはリボンがあつてそこに団体や個人の名が書かれている。それは弔電などを送つた人の名前で、体育総会が並べているようだ。寄贈の花輪ではないようだ。左側は花輪の前に、車椅子の未亡人、長男夫妻をはじめ遺族関係の人たちが整列している。

第一列の三人が、正面に向かつて、深々と最敬礼を三回繰り返し、遺体の周りを反時計まわりに、途中で未亡人に一礼して一周。出場。これで解散である。正面に司会席のようなのがあり女性がなにか喋っていたが、私にはわからなかつた。香典、焼香、献花、坊さん、読経、弔辞、弔電の朗読などは全くない。親族の挨拶もなかつた。お骨拾いもないようである。ここで火葬するかどうかもわからなかつた。日本の葬儀より嚴重なのは、序列である。私たちは外国からの客なので、序列は主催者の次であつた。もし、外国から多く来ていたらどう並べるか、総務担当者は頭をいためるだろう。我々三人は公益社団法人日本山岳会代表、一般社団法人日本山岳協会代表、最後に一般社団法人京都大学士山岳会代表の序列であつた。老史はかつて日本で、自分の序列に不満があり、憤然として帰国したらしい。個人の問題ではなく、肩書きの問題である。面子である。

正午から、国家体育総局によるわれわれ三人への歓迎宴に招かれた。于再清さんが胃の調子が悪いので、楊樹安副局長がホストの席に着いた。全聚徳より歴史古く廉価でおいしいと評判の北京ダックの店。一人前四千円くらいか。酒はビールと葡萄酒で、ノンアルコール

ルビールもあつた。茅台酒は、政府により禁止されているとのことであつた。

例によつて、まず主催者より長々の弁舌があり、平林さんが代表して主催者に負けない返礼の弁舌をぶつた。国家体育総局は、中国登山協会の管理・指揮機関であるから、李致新主席や、続川副主席は緊張していた。皆の話の内容は、老史が優れた登山家、優れた組織者であるだけでなく、中国中、行くところでも人気者であり、尊敬というより、敬愛されていたというものであつた。彼の葬儀には、出席しなければと思つていた私もそのひとりである。

つづいて、一五時半から、中国登山協会による歓迎宴があつた。今度は羊肉のシャブシャブであつた。出席者は李致新はじめ一九八五年日中友好ナムナニ登山隊員たちである。当時副主席の王鳳桐さん、パンダさん（陳尚仁）、張飛さん（張江援）など。ウーラ（五郎）と一緒に無礼講だと張り切つていた。茅台酒ではないが白酒が注ぎかわされ、もうもうと紫煙が満ちた。

私も一席、述べた。ナムナニ登頂成功のとき、老史は北京への無線電話による報告が忙しくて、昼飯が食べられなかつた。それで私は日本のインスタント焼きそばをつくつて、もつていった。老史は喜んで、シェシエ、シェシエ（謝々）と繰り返し返した。彼に感謝されたのはあの時だけだ。趙建軍通訳が、あの時、老史はウーラン（五郎）が砂麵（サーメン）をたべると持つてきてくれたと喜んでいたらよといつた。私は「炒」と「砂」の区別

ができなかつたのである。

二月三日。平林さんと私は趙建軍さんと史岩さんにおくられて、北京空港に向かつた。

李致新主席に弔意を述べただけでなく、敬愛する老史に最後の再見をいい、老朋友たちと杯を酌み交わした爽やかな旅行であつた。

図書紹介

田中淳夫・森と近代日本を動かした男―山林王・土倉庄三郎の生涯

洋泉社、二〇一二年、二五四頁

平井二正

国道一六九号線で奈良県吉野川沿いに川上村に向かうとき、村の入り口の岩に、三〇mはあろうかと思われる「土倉翁造林頌徳記念碑」という大摩崖碑に驚く。この土倉翁というのが、AACK会員土倉九三（故人）の祖父である庄三郎である。（以下敬称略）本書はこの土倉庄三郎（一八四〇〜一九一七）の生涯を書いたものである。

土倉九三は今西錦司隊長のもと、大興安嶺探検の隊員で、梅棹、川喜田らと地図の白色地帯を横断した。また京都の彼の家に下宿してお世話になつた山岳部員は多い。しかし彼の祖父の話は、筆者も含めてほとんどの人は知らなかつたであろう。九三の追悼集に谷泰がすこし触れている程度である。九三にお世話になつた人に知つておいてほしいと思つてこの本を取り上げる。

明治の頃は、吉野と川上村を結ぶ道路は五社峠という峠をこえないといけなかったが、ここを板垣退助、山形有朋、井上馨、伊藤博文、大熊重信、松方正義、さらに新島襄、国会議員など多くの著名人が越えた。すべて土倉庄三郎に面会するためである。このような人を含めて視察者は三〇年間で通算一〇万人に達したという。交通機関の不便さを考えるとこれは驚くべき数字といえよう。

本の副題にあるように庄三郎は吉野の山林九〇〇〇haを所有する大山主で、そこから切り出された木材が生み出す富は桁違いに大きく、当時三井財閥と並ぶと称せられた。

庄三郎は吉野の造林に心血を注ぎ、造林技術を確立した。さらに木材運搬用の道路の建設、木材を流す河川の改修など、彼の事業はその経営手腕とともに成功をおさめた。後に東大教授となる本多静六は土倉屋敷に寄宿し、庄三郎のもとで、実地に林業技術を学んだという。

著者田中（森林ジャーナリスト）は、明治の頃の林業が国土と歴史に与えた影響の大きさは、土倉庄三郎の足跡を追うことで明らかになると思い、この本を書いたという。しかも庄三郎のえらいところは、単に林業だけにとどまらず、明治の近代化に貢献したことである。

たとえば同志社大学や日本女子大の設立を財政的に支援し、その設立に貢献する。板垣退助の洋行費の援助も行うなど、自由民権運動にも力を貸し、その財力をいかして明治以後の近代日本の発展に大いに貢献した。自由

民権でもキリスト教に対する肩入れでも、さらに女子教育をはじめ、学校教育への理解でも、彼は時代を先取りした目をもっていて、それを実践していった。

彼は六男五女の子をもち、その長男鶴松が九三の父である。後に鶴松は事業に失敗し、土倉家を破綻に追い込んだ。一方次男の龍次郎は一八九五年軍属として台湾に行き、一〇〇日分の食糧をかついで台湾の基隆から台南まで台湾山脈の縦走を行った。当時としては珍しい記録である。彼は後に台湾総督府から山林を租借し、植林事業に成功する。さ

AACK会員専用、日本山岳協会 山岳共済会および山岳遭難・搜索 保険の案内

〈二〇一三(平成二五)年度〉

AACK事務局

日本山岳協会の山岳共済会および山岳遭難・搜索保険の二〇一三年度の加入方法などの案内です。加入を希望される方は下記の要領で手続きを行ってください。

この山岳遭難・搜索保険は、「日本山岳協会山岳共済会」が契約者となる団体傷害保険です。したがって、この保険を申し込み、被保険者(補償の対象者)となるには、「日本山岳協会山岳共済会」の会員になる必要があります(保険加入と同時に申し込む)。

AACKでは、この保険に加入する条件と

らに水力発電、樟脳事業に成功した。その他、土倉一族はそれぞれの場所で日本の近代化に対する貢献につながる活動をしている。

本書は単に土倉一族の栄枯盛衰の歴史として読むのではなく、地理的にも中央から隔絶した田舎にいた男が、近代日本に如何に貢献したかという視点で読むと興味ある内容である。なお九三の長男大明は、地質調査を職業としているが、その傍ら、岩壁や氷壁登攀などに挑んでおり、AACKのニュースレターの印刷発送などを行っている土倉事務所社長である。

して、山行の一週間前に、AACK担当者へ登山計画書を提出することとしていますので、ご承知おきください。これは山岳共済が定める保険金支払の条件ではありませんが、保険対象となる事故発生時にAACKが会員の皆様に対して対応するときには山行内容を把握しておく必要があるために対応をお願いしているものです。

海外山岳コースの保険に加入すると海外登山での遭難搜索費用等が支払われ、国内・海外両方に加入されていると、加入コースにより両方から保険金が支払われます。山岳共済会の海外保険の加入の有無に拘わらず、海外登山やトレッキングの場合も必ず山行計画書を提出して下さい。

現在、制度の運用に必要な業務は横山宏太郎様、永田 龍様にご協力をいただいています。連絡先などを間違えないよう、ご注意ください。

ださい。

前年度からの変更点をまとめると、以下の通りです。

コース名称「山岳登攀コース」は「登山コース」に変更。
「軽登山コース」は「ハイキングコース」に変更。

新タイプ「ハイキングコース」に、「タイプⅢ」が新設された。
この新タイプを除き、保険料は、昨年と同じです。

一、山岳遭難・搜索保険の種類

(一) 登山の内容により、「登山コース」と「ハイキングコース」があります。登山コースは、ピッケル・アイゼン・ザイル等を使う登山やロッククライミング、冬山登山などを対象とします。登山コースには、保険金額と、入院保障の有無で、八タイプがあります。ハイキングコースは初心者でも可能な一般登山道での普通の登山（夏山登山で雪渓を越えるために軽アイゼンを使用した場合も対応する）が対象です。ハイキングコースの場合は登山コースと異なり、疾病が原因となる搜索費用は補償の対象となりません。ハイキングコースには、保険金額の異なる三タイプがあります。

二〇一二年度から、個人賠償責任補償のないタイプが加りましたが、保険料の差額は、四八〇円です。山岳共済会としては、個人賠償付きを薦めています。

以上の中からいずれか一つだけ、希望の

コース・タイプを選んで加入します。それぞれの保険料に、年会費一〇〇〇円を加えた合計支払金額を払い込みます。

コース・タイプの詳細は、三項の(一)、(二)または(四)で確かめてください。
(二) 登山コース、ハイキングコースのいずれも山行中のみならず、日常生活でのケガも補償の対象になります。

(三) 通年の場合、期間は毎年四月一日午前〇時から翌年四月一日午後四時までです。継続の方は、前年度の契約終了の四月一日午後四時から、新年度の契約が有効となります。中途加入も受け付けられます。保険料は開始月ごとに設定されています。

(四) 海外での登山やトレッキングを対象にする海外山岳コースは、基本契約タイプの一種類だけで、保険金額は次のとおりです。昨年と同様に、遭難搜索費用には緊急救助ヘリコプター費用も保証されることを確認しています。

死亡・後遺障害 一〇〇万円

救済費用 五〇〇万円

個人賠償責任 一億円

保険料は、対象の山岳、日数により個別に見積もられることになっていますので、海外登山又はトレッキングに行かれる方は、事前に横山様を通じ山行計画を提出して、保険料の見積もりを取得して下さい。国内と同様に、山岳共済会の会員であることが加入の条件になります。国内の山岳遭難・搜索保険に加入している場合は、一部は海外でも保険対象となります。

二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した電子メールまたは加入申込書を、AACKの指定する山岳共済担当者（横山宏太郎様）に提出し、指定の銀行口座に保険料十年会費一〇〇〇円を振り込んでください。

(一) 申込必要事項（書式自由、なるべくメール本文に記入）。

①氏名（フリガナ）

②生年月日（例：昭和三二年五月二一日）

③郵便番号と住所（フリガナ）

④電話番号、FAX番号

⑤電子メールのアドレス（ある場合）

⑥職業名・職種名

⑦加入コース・タイプ、振り込み金額（保険料十年会費の合計額）

⑧同種の危険を補償するための他の保険契約があるか

ある場合は、被保険者氏名、保険種類、死亡・後遺障害保険金額、入院保険日額、通院保険日額を記載

⑨過去三ヶ年間にケガで保険金（五万円以上）を請求又は受領したことがあるか

ある場合は、被保険者氏名、保険会社、回数、合計金額を記載

(二) 担当者の連絡先は次の通りです。原則として電子メールでお送り下さい。

電子メール：peng-y@amy.hi-ho.ne.jp

横山宏太郎

(三) 保険料十年会費の振込口座（申込みと

同時に振り込んでください)

銀行・第四銀行稲田支店(ダイシギンコウ
イナダシテン) 店番号五一四

口座番号・普通預金一二四一九三一

名義・A A C K 山岳保険 横山宏太郎

(エーエーシーケーサンガクホケン ヨコ
ヤマコウタロウ)

(四) 四月一日からの保険加入の締め切りは
三月四日です。時間がないのでとりあえず担
当者(横山様)へ、電子メールまたはFAX
で申し込みの連絡をしてください。

(五) 手続き完了の翌月に日本山岳協会から会
員証(加入者証)が担当者に送付されてきま
すので、担当者から本人に転送します。会員
証の有無は保険の効力には影響ありません。

三、その他

(一) 詳しい内容等は、昨年度の案内がNo.60
(二〇二二年四月号)にありますのでご参照
ください。

(二) 山岳共済会の山岳遭難・搜索保険の案
内パンフレットを、A A C Kのウェブサイト
に置きました。加入される方は、内容を確認
してください。

(三) 日本山岳協会のホームページにも説明
があります。ただし、情報の年度にご注意く
ださい。

山岳共済会 [http://www.jma-sangaku.org/
kyosai/profile/](http://www.jma-sangaku.org/kyosai/profile/)

(四) 山岳共済に関する疑問点や、更に詳し
い説明が必要な場合は、担当の横山様にお問
い合わせください。原則として電子メールで

お願いします。アドレスは peng-y@amv.hi-ho.ne.jp です。

会員動向

編集後記

現役のみでヒマラヤの未踏峰の初登頂に成
功したのは、OBによる探査紀行の成果から
華を咲かせた連携プレーの快拳である。しか
しこのOBよりちよつびりお目玉の一文をい
ただいた。成功に浮かれることなく、OBの
言葉を糧にしてさらに精進していただくこと
を願う。

この編集子、ハット気がつけば五年を越え
ている。ニュースレターがA A C Kの会員に
とっていつも新鮮な情報誌であるためには、
編集子はどんどん変わるべきであろう。どな
たかお引き受けただけでないでしょうか？
次号はヤルン・カン四〇周年記念号を企画
しております。これ以外の原稿も大いに歓迎
いたします。原稿の締め切りは四月二〇日
です。

発行日 二〇一三年二月末日

発行者 京都大学学士山岳会 会長 松林公蔵

発行所 〒六〇六八五二

京都市左京区吉田本町(総合研究一号館四階)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究所 竹田晋也 気付

編集人 前田 司

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所